
パパラッチ? いいえ、情報屋です

シンクレア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパラッチ？いいえ、情報屋です

【Nコード】

N2086X

【作者名】

シンクレア

【あらすじ】

説明するまでもないテンプレによって転生した先はなんと麻帆良のパパラッチ！？

こうなったら・・・情報屋として成功してやる！！

テンプレな転生物ですが最強ではない・・・つもりです。

転生前は男ですが、メンタリティは和美とまざっているので結構ぶれます。

受験勉強の合間に現実逃避のために書いている作品ですので超亀更
新・不定期更新ですが、よろしければ読んで下さい。

プロローグ：情報屋の始まり

俺の名前もこれまでの人生もこの小説には関係ないからどうでもいい。

オタク高校生＋転生トラック＋神様（幼女）　な状況だと理解してくれ。

……どうしてこうなった？

「というわけで貴方にはネギまの世界に転生してもらいます。特典付きで」

「えっと、理由は？」

「説明してると時間切れで消滅しかねませんが……」

え、なにそれ怖い

「じゃ、じゃあ特典の数は？」

「五つです」

それじゃテンプレ最強オリシユ的に……

「じゃあ真祖の吸血鬼の体と無限の剣製とナギの倍の魔力とラカンの倍の気と直死の魔眼！！」

「むりです」

「なぜに!?!」

「1、私の力が足りない

2、貴方の魂の格が足りない

3、転生先の肉体と相性が悪い

の3つが理由です」

・・・この神様しよべえ

「て言うか転生先の肉体って誰よ？」

「朝倉和美の肉体です」

パパラッチかよ！？

パパラッチに相性がいい能力っていうと・・・

「じゃあ、対人能力・語学力・情報収集、処理能力・諜報能力・隠密能力は？」

「相性がバカみたいにいいので特典一つ分です」

さすがパパラッチ

「じゃあ一つ目はそれで。二つ目は・・・マジックアイテム作成能力は？」

「えっと、以外と相性は悪く無いですね。造れる物の範囲やレベルで効果も変わりますが」

「全部だと？」

「その場合才能と資料だけで後は努力次第、ということになります。知識や技術はゼロです」

うーん、悩むが多分これが身を守る為の最大の能力になるんだよね・・・しょうがない

「それでいい。次にダイオラ魔法球。サイズは工房と資料室、情報室、倉庫のある家とマジックアイテムと魔法を試せる程度の広場、倉庫にはマジックアイテムの材料をたっぷり」

「倉庫の中身がかなりきついですね・・・。時間差は六倍で、最大

「え、ちょ、ちよつと待ってくださ」

「5、4、3、2、」

「わ、分かりましたよ〜。」

・・・お、これが仮契約の魔方陣か。・・・ではいただきます。

チュツ

・・・でたでた。

名前は・・・悪魔の目!?

「おい、神様と仮契約して出てくるアーティファクトが悪魔の目ってどういうこと?」「うう・・・汚された・・・」

「おい」

「初めてだったのに・・・」

「おい!」

「ひゃ!?!な、なんですか!?!」

「このアーティファクトなんだけど、なんで悪魔なん?」

「神と悪魔は裏表ですから・・・私の神性に貴方の悪魔的性質が加わった結果では?」

「なんで俺悪魔?」

「乙女のファーストキスを無理矢理奪っておいて何言ってるんですか!?!」

「あゝ、確かに。悪かった」

「知りません!とつとと転生しちゃって下さい!えいっ!」

「え?え、ちょ、ま、うわ~~~~~!?!?」

・・・最後は穴開いて落下って本当テンプレだな。

第1話：情報屋誕生

・・・ここは・・・ベッドの上か？

とりあえず現状を把握しようと思いを見渡・・・せない。
どうやら首すら座ってすらいない赤ん坊らしい。

・・・どうしると!？

ま、まあ動けないのは仕方無いし、出来ることから始めよう。うん。
まずは特典の確認から・・・

・・・あれ？

俺の特典

- 1：情報屋スキル
- 2：マジックアイテム作成
- 3：ダイオラマ魔法球
- 4：魔法の才能
- 5：仮契約

使えねえ!？

- 1 動けない・喋れないで何しろと？
- 2 同上
- 3 魔法球見当たらない
- 4 1と同様
- 5 カード無い、そもそもアデアッドが言えない

本気で何も出来ないじゃねえか!?

落ち着くんだ、素数を数えて落ち着くんだ。

1、4、6、8、きゅ・・・って逆だ!

っーか本当にどうすんだ~~~~!!!!???

どうにもなりませんでした。

そのまま赤ちゃんプレイをさせられてる現状。

ちなみにどれぐらい経ったかは分からん。赤ちゃんボデイだから眠くてしょうがないのだ。何回夜が来たかなんて数えられん。

で、それでも赤ちゃんプレイの被害を最小限に抑える努力はしてる。

・・・オムツを換える時やるのが母さんだったら大人しくして、父さんだったら泣くとか。

うん、本当に気休め程度だよな。それでもやらないよりはましだ。実際女になってるのに父親にオムツはちよつと・・・。

ちなみに効果も出てる。最近オムツは母さんの担当にするとか話してた。

さて、そんなベイビーな俺だが何もしてない訳じゃない。
最近の俺の日課・・・それはなんと！筋トレである！！

・・・手足を数センチパタパタさせるだけでも言うが。
ちなみに現在の目的は寝返りをうつことだ。

そこ！しょぼいとか言うな！寝返りは赤ん坊の第一歩なんだよ！喋るとか歩くとか以前にハイハイ、その前に寝返りなんだよ！

あと、寝返りぐらいその気になれば簡単に出来るようになるんじゃないかね？とか思ったやつ！

布団に寝っ転がって、手足をしっかりつけて手足に力を一切入れずに寝返りうってみる、むっちゃ力いるぞ？

・・・とりあえず、最低でもハイハイは出来ないと動くことも出来ないからな。がんばろう、うん。

第1話：情報屋誕生（後書き）

どうも、シンクレアです。

短くてすいません。主人公が動けるようになればもっと長くなると
思います。

全くの初心者なので、もし改善点があったら教えてください。

第2話：活動開始？（前書き）

今回は説明回です。

第2話：活動開始？

ついに！ついにハイハイが出来るようになりました！！
これで行動範囲が大幅に拡大！・・・しませんでした。

ほら、俺赤ん坊だからさ、ベビーベッドに乗ってるわけなのよ。
で、ベビーベッドって赤ん坊が落ちないように柵があるわけだ。
つまり、移動できるようになったとはいえ行動範囲はあまり、とい
うかほとんど広がらないってこと。

・・・それにしてもこの柵の中って牢屋か動物園の檻の中にいる気
分になるんだよなあ。

親が「かずみちゃん」とか言いながら覗き込んでくるのを考える
と動物園かなあ。

とはいえ全く行動範囲が広がらなかった訳でもない。

出たそうにしてると時々出してくれる。・・・監視付きだけど。と
か言ってるのを横目にオモチャ箱を覗くと・・・なにやら直径5セ
ンチほどの、中にミニチュアの家が入ったガラス玉が！！

あまりに嬉しかったんで両手に持って騒いでたら母親が

「これが気に入ったの？・・・こんなのあつたかしら？まあ和美ち
やんが気に入ったのならなんでもいいわね」

とか言ってた。いいのかよ。そもそも赤ん坊にガラス玉なんて割れ
たら危ない物持たすか？・・・これが麻帆良補正か。

とにかく、気に入ったことをアピールしまくって、ベッドに戻る時
も離すのを嫌がった結果ベッドに持ち込むことができた。

よーし、早速！レッツゴー！

無理ですよね。

小型とはいえダイオラマ魔法球なのだから、エヴァのと同じで一定時間（おそらく中で6時間、外で1時間）は外に出られない可能性が高い。

そんな長時間赤ん坊が出れるはずの無いベビーベッドから消えたら？間違いなく大騒ぎになる。

しかたない、せめて幼稚園に入るまでは我慢するか……。

……出来るかー！！

これまで何カ月も何も出来ない赤ちゃんライフに耐えてきたんだぞ！？これ以上は俺の精神力が耐えられん！！

と、言うわけで作戦を考えよう。

大事なことはただひとつ、親に気づかれず1時間行方不明になること！

実際騒ぎになると本気でまずい。万が一魔法使いに気付かれたらガチでまずい。

ダイオラマ魔法球だって気付かれたら多分没収されるし、そうなる
と俺の特典が一つを残して失われる。

で、実際どうするかだが。

・・・まあ夜しかないよな。

幸い俺が全く夜泣きをしないので、両親とも夜はぐっすりだ。・・・多少は妙に思ったみたいだが、麻帆良補正で納得したっぽい。あとはトイレに起きたりしないことを祈ろう。

そして夜。早速行動に移る。

エヴァの魔法球は近付いただけで中に入ってたが、どうも俺のは手に持って「入ろう」と思わなければいけないようだ。

・・・小さいから出力も小さいのかな？

とにかく手に持って・・・レッツゴー！

目の前が光に包まれて、また見えるようになった時には木製の床の上に寝ていた。

ちなみに、魔法球の外から見た感じだとエヴァの家っぽいログハウスに石造りの（工房と思われる）四角い箱状の建物がくつついた形だったから、たぶんその家の部分だろう。

で、起き上が・・・れないのでうつ伏せになってハイハイの要領で周囲を見回すと、目の前に・・・なんだこれ？

異様に画面がデカイ、色々よくわからない部品がついたパソコンのようなものが置いてある。

・・・何なのか分からないので一先ず放置、その横に置いてある手紙と6個の指輪と小さい杖とパクティオーカードに目を向ける。ち

なみに金色の指輪が1つに銀色の指輪が5つだ。人間じゃない何かの目を模したような少々不気味な模様が彫ってある。

この指輪が何なのかは多分手紙に書いてあるだろう……どれどれ？

和美ちゃんへ

転生おめでとunggざいます！

まず、パクティオーカードを含め赤ん坊が持つには不自然な物は全てこの魔法球に入れてありますので確認しておいてください。

なお、魔法球自体はあなたが6才になるまでは無くなったりしないように神パワーで護ってあります。6才の誕生日に効果が消えますので、それまでに自力で守れるようにしてください。

また、この魔法球の最低滞在時間は外で1時間、中で6時間となっています。

さて、次に特典以外のサービスについて説明します。

・・・面倒なのですが、説明をサボったことを上司に怒られたので、サービスを付けることになりました。

1つ目は、初心者用の魔法の杖です。魔法の練習に使ってください。性能は通常の物と変わりません。

2つ目は金色の指輪、それは指輪型の魔法の発動体です。神パワーで作ったので、かなり強力です。ただし、あなたしか使えないように制限がかかっています。

3つ目は銀色の指輪5個、これは、魔法球内部での成長・老化を外の時間と同等に抑える効果があります。ただし、この魔法球から持ち出すことはできません。

以上3つがサービスとなります。

次に、アーティファクトについて説明します。

あなたのアーティファクトである悪魔の目は、今ここに置いてある巨大なパソコンの様なものが本体となります。そして、その本体が作り出した「目」の見た映像を見たり記録したりできる、というのが基本的な能力となります。

具体的には、

「目」について

1：本体を操作することで、最大666個の「目」を作り出すことができる。

2：「目」は視覚と聴覚を持ち、ある程度は自分で判断して行動する。ただし、基本的には最初に設定した通りに行動する（特定の場所や人物の監視など）。

3：「目」は物理的、魔術的、科学的のあらゆる方法で視認されることがない（使用者は存在は感知できるが視認はできない）。

4：「目」は物理的、魔術的なあらゆる物を透過することができる（魔法による攻撃もすり抜ける）。

5：「目」は世界を越えて情報を伝えられる（魔法世界から地球、魔法球の外から中など）。ただし、時間の流れが異なる時はリアルタイムで映像を見ることが出来ない。

6：所有者は意識することで特定の「目」と視覚、聴覚を共有できる（リアルタイム映像として扱う）。また、その目を任意に操作することもできる。

本体について

1：「目」を作り出すことができる（最大666個、作り出した順に番号が付く。全て同じスペック）。

2：「目」の見聞きした物を全て記録する。

3：記録した映像を写真、若しくは立体映像の動画を作る紙として現像する。

4：映像の視聴のみ出来る子機を最大13個作り出す。

5：なお、操作は基本的にキーボードで行うが、所有者のみ触れて念じるだけで使用可能（逆に言えばキーボード操作でなら所有者以外にも使用可能。子機も同様）。

注意点として、カード化すると記録は残る物の「目」は全て消えてしまうため、可能な限りカード化はしない方が良い。

以上でアーティファクトの説明も終わります。

特典、サービスを生かして第2の人生をどうぞ楽しんでください。

神より

PS

私のファーストキスを奪って下さりやがったお礼はたっぷりしておいたので楽しみにしててください。

……色々やばい。

まずサービスだが、老化予防はむちゃくちゃありがたい。

何しろ年齢が年齢だから余分な成長はかなり目立つだろうからな。

・取り敢えず嵌めておこう。

発動体についても、作る手間が省けたのも強力なものが手に入ったのも嬉しい。

わざわざ2つあるのは初心者の中から強力な発動体は逆に失敗するということと考えていいだろう。

で、アーティファクトだが、……なにこのチート。

絶対バレず発見されないリアルタイム盗撮・盗聴セットとか最早情報戦で負ける気がしない。

……取り敢えず残りの時間使って可能な限り設置することにしよう。

よし！これが情報屋・朝倉和美の第一歩だ！

・・・え？PS？・・・何されたんだろ。

第2話：活動開始？（後書き）

まず、エヴァの魔法球があのサイズなのに小さすぎると思った人は神補正と考えて下さい。ぶっちゃけ話の都合の問題です。

また、次話からは原作との整合性を考えながらになりますので速度が落ちるか。

最後になりましたが、読んで頂いてありがとうございます。
感想を頂けると嬉しいです。

文字化けしているとの指摘がありましたので修正しました

第3話：観察

6時間かけて「目」を配置し終えて戻って来たが、幸い両親には気付かれなかったようだ。

とはいえ毎回幸運が続くとは限らない。幸い「目」との感覚共有はこのままでも可能なのだから、暫くはそれで暇潰し&情報収集をしよう。

ちなみに「目」の配置についてだが、まず原作キャラには1人1つずつ監視を付けている。・・・まあ、魔界までは送れないので魔界在住のキャラやまだ生まれていないキャラには出現もしくは誕生し次第監視につくように命じてある。

・・・この「目」は異常に優秀で、簡単に個人を認識し直ぐに自力で探し出してくれるのだ。しかも移動速度が亜光速に近い。後から分かったことだが、転移魔法や転移符にも数秒のタイムラグで追いつくのだ。

なお、魔法世界にはウェールズのゲートから密入国させている。

さて、原作キャラの現在はどんな感じだ？

@麻帆良

21Aメンバー

・・・分かってたけどみんな赤ん坊だな。麻帆良にいて、かつ赤ん坊でないのは相坂さよとエヴァンジェリンの2人みたいだ。

相坂さよ

変わらねえなこいつ。原作と全く同じだ。昼は授業に（見えないのに）出て、夜はコンピニの前に座り込んでる。後で拾いに行こう。何かの役には立つたろ。

エヴァンジェリン

「エヴァちゃんおはよー！」

「あ、おはようございます」 エヴァ

「エヴァちゃん、宿題見せて〜」

「まったくもう、自分でやらなくちゃ意味がありませんよ？」 エ

ヴァ

「・・・・・・・・だれこれ。」

・・・あ、そういえばまだエヴァは中学生生活一周目なのか。それで「光に生きる」を实践中ってわけか。

・・・・・・・・マジで面白いな。

エヴァの記録は欠かさないようにしよう。

魔法先生

原作にも出てくる魔法先生は・・・明石教授と神多羅木先生ぐらいか。後はみんなこれから赴任するのかな？

ちなみに、新田先生はいた。この時から「鬼の新田」の名で呼ばれていたらしい。後、卒業生の人気がむちゃくちゃ高い。同窓会に呼ばれる回数もダントツ1位だ。

まあ、原作でも一番マトモな先生だったからな。

世界樹

現時点では中に何も無いから唯の高い魔力を持った大樹でしかない。これと言って注目すべき事は無いな。

学園長

さて、ぬらりひょんは何をしてるのかな？原作でも悪い意味で黒幕っぽいと言つか政治屋っぽいと言つか変な人間？だったけど……ん、電話中か？

「じゃが仕方なからう、今婿どのが呪術協会の長の座を下りるわけにはいかん」

ん？相手は詠春か？

「しかし、私の政治力では下の人間を抑えきるません。いつ反乱が起きてても可笑しく無いんですよ！？」

おお、電話の相手の声まで良く聞こえる。逆に雑音は自由にカット出来るし本当にこの「目」は優秀だな。

「じゃがそれは木乃葉が死んだ時から分かっておったことじゃ。今婿どのが長の座を下りたら、本国は間違いなく呪術協会を滅ぼそうとする。実際西洋魔術師に滅ぼされた魔術組織はケルトのドルイドやネイティブ・アメリカンのジャーマンを初めとして数多くある。それを防ぐためにワシは60年かけて関東を掌握したのじゃし、婿どのを「英雄」にして呪術協会の長にしたのじゃ、木乃葉を差し置いてでも」

「それは・・・分かつてはいるのですが・・・」

「それに、婿どのが掌握できんと言うのも仕方の無いことじゃ。元々そういつた政治的な事は木乃葉に任せるつもりじゃったからの。・・・まさか木乃葉がこんな早く死ぬとは誰も思つたらんかった」

「・・・申し訳ありません。木乃葉を助ける事ができず・・・」

「婿どのが謝る事では無いワイ。人の命と言うものは人間の手に余るものじゃしもう。」

それはそうとの、婿どのが。木乃香の事についても2つほど話があるのじゃ」

「木乃香の事・・・ですか？」

「うむ。1つ目は、木乃香には魔法の事を教えないと言うことじゃ」

「な！？何を言っているんですか！？木乃香は間違いなくうちの過激派に狙われる事になるんですよ！？自衛の手段を教えないなんて危険すぎます！！」

「過激派の物理的な攻撃から守るだけならどうにでもなるう。本気で力づくで協会を掌握出来る等と考える馬鹿は少ないし、賛同も得られん。それより怖いのは政治的に来る連中じゃ。」

木乃香は仮にも近衛の直系、優秀な陰陽師になることは間違い無い。そうなたら間違いなく木乃香が長に相応しいと祭り上げる連中が出てくる事になる。木乃香を傀儡にするわけにはいかんのじゃ。」

「そういう事ですか、しかし・・・いえ、分かりました。ですが、

木乃香に陰陽術を教えない事には反対も強いと思いますが？」

「うむ。それについてなのじゃが、2つ目の話として、木乃香が小学校に上がる年になったら麻帆良に来させようと思うのじゃ。」

「1人で麻帆良に行かせるという事ですか!？」

「うむ。そうすれば木乃香を守り易くなるし、過激派の目もこちらに向くから婿どのも多少楽になるじゃろう。木乃香にはさみしい思いをさせてしまうことになるが・・・」

「・・・分かりました。木乃香の安全には代えられませんからね」

「うむ。ではの、大変じゃろうが頑張ってくれい」

「はい。ではこれで」

ガチャッ

「・・・ふう、まったく、何事も思い通りにはいかんのう。婿どのにも木乃香にも苦労させてしまうことになってしもうた・・・」

「・・・予想外だ。

まさか学園長がこんなことを考えていたとは。・・・もしかしたら仲良く出来るかもしれないな。

・・・この録音だけで学園長完封出来るよな。

@京都

ぶっちゃけあまり見所は見当たらない。

只、憎しみに燃える若き天ヶ崎千草はかなり怖かった。

あと詠春が過労死しそう。こりゃ10年後にあれだけ弱くなってるわけだ。

@ウエールズ

本気で見所がない。ロリネカネがいるだけだ。

@魔法世界

逆に見る所が多すぎる。ナギとアリカの旅とか筋肉バカとかナギとアリカのイチャラブとかアリアドネーのセラスや騎士や授業とかナギとアリカの戦いとかメガロの汚職とかナギとアリカのニャンニヤンとか。

・・・とりあえず記録出来るだけ記録しとこう。特にアリアドネーの授業は今後確実に修行の役に立つし。

・・・しかし「目」のチートっぷりが半端じゃないな。

第3話：観察（後書き）

学園長の不可解な行動を自分なりに考えた結果、こっぴつキャラになりました。

賛否両論あると思いますが、当小説ではこっぴつという設定でいきます。あと、そのうち学園長の外伝とかもやる予定です。

では、最後に。読んで下さってありがとうございます。

第4話：幼稚園時代ダイジェスト

1992年4月 朝倉和美3才

「あさくらかずみです。これからさんねんよろしくおねがいします」

・・・何してるのかって？

幼稚園の挨拶だよ。入園式が終わったから組で挨拶しなきゃいけないんだ。・・・ちなみにリンゴ組だ。

麻帆良は生徒の数が多いからな。年少組が果物、年中組が花、年長組が木の名前になってる。・・・どうでもいいな。

で、これまで何をしてたかだが・・・ほとんど何もしてなかった。

「目」で色々観察してただけだ。

何しろ幼稚園児にも満たない体じゃ危険すぎる。一度入った時も眠いし腹減るしで大変だったしな。

だから、せめて幼稚園に入るまでは「目」とのリンクで我慢することにしたのだ。

・・・それに集中し過ぎてずっと寝てたり座ったりしてたら親に病気かと思われて騒ぎになったので、それからはある程度は体を動かしてはいるが。

まあ、原作が始まったらある程度体力がないとキツイからな。今のうちから少しずつ鍛えておいた方がいいだろう。

どちらにしろ今日から魔法球も解禁！原作まで可能な限りやってやる！

1992年7月

できたー!!!

3ヶ月毎日1時間魔法球はまないぶつを使って、ついに完成した！
何がって？簡易ゴーレムだよゴーレム。

わたしそっくりの身代わり用のゴーレム。・・・まあ出来ることは寝るだけなんだが、それでも夜寝ている時間（幼児なので9時間ぐらい）をフルに使う事が出来る！起きる前は多少早めに出てくるにしても8時間、中での時間では48時間だ！

因みに中での食事はマジックアイテムの素材の内食べられる物（常に新鮮で、使った分がすぐ補充される）を食べている。トイレもベツドもキッチンもあるので非常に快適な生活だ。

・・・ん？ゴーレム1つ作るのに3ヶ月〓90日×6時間〓540時間もかかるのは長すぎるって？

あのな、多少は魔法や他のマジックアイテムの勉強をしてたつてもあるけど、そもそもいくら才能があつたつて初めて何かをする時は一番始めが大変なんだよ。魔法の方も「火よ」とか「風よ」とかがなかなか出来なくて大変だったしな。

あと、第一人称がわたしになつてるのは親に矯正されたからだ。それに、エヴァが言っていた通り精神は肉体に引つ張られるらしく、最近自分のメンタリテイが幼女の物になつてる気がする。・・・まあ、問題は無いだろ。むしろいつまでも男のメンタリテイを引き摺っていると同姓愛者になりかねないしな。

1992年11月

漸くまともに魔法が使えるようになった。

ゴーレムのお陰で1日に2日分の修行が出来ている事を考えると、大体240日で基礎固めが終了という感じか。マジックアイテムの勉強や情報の整理の3つに時間を分けていることや肉体の年齢を考えると十分だろう。

まあ、基礎と言ってもウェールズレベルの魔法学校では卒業までにやることだから、それと比べればむちゃくちゃ早いんだろうが・・・むしろ魔法学校の授業が遅いと考えた方がいいだろう。ネギが飛び級して10才で首席卒業出来るぐらいだし・・・英雄の息子補正もあるのかも知れないが。

基礎が終わったと言っても戦闘用の魔法は魔法の射手と武装解除と簡単な障壁ぐらいだからこれも何とかしなくちゃいけないしな。

1993年1月 朝倉和美4才

優先的に練習していた影の倉庫が使えるようになった。

これで漸く魔法球や発動体の杖や指輪、その他のマジックアイテムを持ち歩ける。特にこれまではゴーレム（使って無い時は子供の手のひらサイズの人形）を持ち歩くのが大変だったからな。

影魔法の目標は影のゲートを無詠唱で使うことだが、多分まだかなりかかるだろう。

因みに、雷の魔法は攻撃魔法を、影の魔法は影の従者等の便利魔法を伸ばしている。原作までには準最強級にはなっておきたいからな。

1993年5月 朝倉和美うめ組

年中組になった。うめは花扱いらしい。

それはともあれ自律ゴーレム（試作型）が完成した。あくまで試作なので、機能は無視して自意識を持たせる事に集中したのだが。

「まったくご主人はどうしてこんな体に作りやがったんだよ。不便でしょうがねえじゃねえか！」

・・・どうしてこうなった？

「聞きやがれご主人！せめて人間サイズにしろ！」

・・・チャチャゼロもあれだし何か法則でもあんのかな。

「聞きやがれ！！！」

「あくはいはい、ちゃんと聞いてるよ。別にいいじゃん瑠璃。何か仕事してもらうわけでもないし」

このゴーレムの名前は瑠璃。外見は紫色の髪に名前の通り瑠璃色の目の身長30cm、3頭身の人形だ。・・・ちなみに今のところ特別な力は本気で何も無い。

「よくねえよ！役に立たないゴーレムなんて字がかけない鉛筆以下じゃねえか！」

「・・・妙な例えを。てゆくかなに、つまりわたしの役に立ちたいわけ？」

「ち、ちげえよ！ゴーレムとしての存在意義の問題だよ！変な勘違いすんじゃないか！」

「・・・ツンデレ」

「ちげえっ！！」

面白いなあこいつ。

「まあ、暫くは話し相手とか相談相手とかになってくれればいいよ。1人でずつともつてると鬱な気分になってくるしな。」

「・・・しょうがねえなあ。暫くはそれで我慢してやるよけど、その内ちゃんとした体作れよ？」

「ああ、はいはい。その内ね、その内」

「いい加減な返事すんじゃないか！」

「諸々の事情を考慮に入れつつ前向きに検討させていただきます」

「考えるつもり皆無って事じゃねえか！」

「・・・うん、ホント面白いなあこいつ。」

1993年12月

雷の魔法は雷の暴風まで、影の魔法は従者7体まで使えるようになった。自分の成長速度がちょっと怖い。

ネギには劣るものの準最強級上位になれる才能+アリアドネーの授業(盗聴)+十分な連続した修行時間=チート
って事なんだろう。

逆に、自律ゴーレムの作成は難航している。

わたしの補佐や代理として使う積もりで作っているため、必要な機能が多いのがなかなか上手く行かない原因だ。

求めている機能は

- ・人間と区別がつかない外見
 - ・ある程度の交渉技術
 - ・それなりの戦闘能力
- の3つなのだが、2つまでは何とかあったが3つ目を付けようとすると上手くいかないのだ。

その結果

- 1番：交渉も戦闘も出来るが明らかに人形(サイズ・形からして人外)
 - 2番：強くて人間と区別がつかないがまともに会話が通じない(命令が理解出来ない事すらある・・・)
 - 3番：口が上手く人間と区別がつかないが弱い(一般人以下)
- の3種類が出来た。

・・・使えねえ。

ちなみに瑠璃は1番に改造された。
その瑠璃曰く「3番に仕事させて1番に護衛させりゃいいじゃねえか」とのこと。

・・・暫くはそれでいくか。

と、言うわけで3番1人に1番5体という編成で5組ほど魔法世界に送った。・・・全員に子機を持たせて。

こいつらの仕事はわたしを長とした情報屋組織を魔法世界に作ること。今から始めれば原作までにはかなり大きくなるだろう。子機だけでも十分チートだしな。

・・・ちなみに瑠璃は武装が付いてからチャチャゼロ化が進んでいる気がする。会わせたらどうなるんだろ。

1994年4月 朝倉和美5才、いちよう組

ゴーレムはなかなか上手くやっているようだ。情報屋組織「暁」はじわじわと有名になって来ている。これなら原作までにはかなり大きくなるだろう。

ちなみに「暁」の名前はゴーレムに適当に決めると言ったらこうなった。朝倉の「朝」から、らしい。

最近はゴーレムの改良が行き詰まっているので、魔力や物理・魔法防御力を上昇させるマジックアイテムの開発を手がけている。

他にも認識阻害系のアイテムを制作した。お陰で瑠璃を連れ歩けるようになったし、アイテムや魔法の実践も出来るようになった。・・・魔法使いに見つからないように、なので細々とだが。

魔法の方は魔法の射手の無詠唱がそれなりに使えるようになった。
影は元々存在する物を操るといって性質上無詠唱に向いているため、
タメ無しで17矢・有りなら101矢まで、雷でもタメ無しで5矢・
有りなら23矢まで使える。

あと何故か瑠璃が魔法を使えるようになった。・・・ふざけて試し
てみたら上手く行くとは・・・。ちなみに属性は土だけだった。

1994年12月

この1年色々あった。主にわたしに関係無い所で。
つまり、ネギが生まれたりライフメイカーが封印されたり明石の母
親が死んだりした。

多分あの戦いを安全に見学出来たのはわたしだけだろう。

他にも、明日菜がタカミチに連れられて来られたりもしている。

わたしの方では、千の雷を使えるようになった。・・・補助呪文フ
ルに使って魔力使いきってやっと、だが。
影の従者も20体まで扱えるようになったし、瑠璃も戦力に入れた
らかなり戦えるようになっただろう。

・・・ちなみに瑠璃が使える魔法は魔法の射手・砂の(1、7、1
9、53、101)矢と石化の吐息と障壁だけだ。
何しろルーンを内部に彫り込んだ魔法しか使えないからな。・・・
その代わり全て無詠唱という恐ろしい事になっているが。

それにそもそも瑠璃は接近戦型だしな。・・・腕が割れて中から1メートル以上ある鎌が出てくるのは見ていてかなり怖い。しかも接近戦中に無詠唱魔法が飛んで来るんだからな・・・。

あと、瑠璃に食事を出来る機能を付けたら料理をしてくれるようになった。

「自分が食べたいからだからな！変な勘違いするんじゃないぞ！」とか言ってた。ツンデレ乙。
幸いマジックアイテムを（3番型ゴーレムが）売ったお金で食材や調味料を（これまた3番型が）買ってきているのでかなり豊かな食卓になっている。

なお、ゴーレムは皆時々メンテナンスに帰ってくるので、常に最新機能満載な状態になっている。

1995年3月 朝倉和美6才 もうすぐ小学1年生

漸く幼稚園を卒園出来た。

幼稚園では明るい物知りキャラで通してたからかなり疲れた。でも、急に情報通キャラになるのは不自然だから仕方ない。

・・・麻帆良では平気かも知れないが念のためだ。

これまでは修行メインだったが、これからは自分でも活動する予定だ。

・・・頑張ろう！！

第4話：幼稚園時代ダイジェスト（後書き）

次話から和美が動き出します。

第5話：味方作り

小学校の入学式が終わり、学校に通い始めて初めての日曜日。わたしはこれから情報屋としての第一歩を踏み出す。

ちなみに木乃香は西からちゃんと来た。・・・ほぼ同時期に刀子が西洋魔術師の恋人との関係を認められて麻帆良に赴任してきたのは偶然なのだろうか。

なお、明日菜はまだ転入して来てはいない。

「・・・よし、今なら大丈夫そうだな」

わたしが（漸く使えるようになった影のゲートで）向かおうとしているのは学園長室（今は小学校の校舎にある。あからさますぎだろ・・・）だ。

「情報屋」として活動する以上顧客は必須、そして現在最も味方につけて役に立つのは学園長だからな。

そして「目」で学園長以外誰も居ないことを確認して転移・・・は流石に学園長室に直接は無理か。ちゃんと転移魔法を妨害する仕掛けがある。

ちなみにこの学園の学園結界の外から中へは転移魔法が使えないが、中から中へなら問題なく使える。

気を取り直して学園長室の前に転移、そしてドアをノックする。同時に「目」で学園長を見ているが、急な転移魔法の反応にかなり警

戒しているようだ。

そして「開いてるから入りなさい」との声。

・・・さて、どう来るかな？

side 学園長

正直に言って驚いたワイ。

何しろいきなりワシの部屋の前に誰かが高度な転移魔法で転移して来たうえ、その気配がエヴァより小さい子供の物だったのじゃからのう。

とはいえノックをしてきた以上いきなり敵対してくることもないじやろ。

「開いてるから入りなさい」

さて、鬼が出るか蛇が出るか。どうなるかのう。

入って来たのは小学校に入るか入らないか、といった年齢の女の子じゃった。

・・・こんな子供がのう。人外や幻術の気配はしないが・・・せいぜい防御用のマジックアイテムに見えるローブと肩に乗った・・・ゴーレムかの、これは。

「はじめまして学園長先生。麻帆良小学校1年E組の朝倉和美です」

「はじめまして和美ちゃん。それで何の用ののう」

朝倉和美・・・どこかで聞いた名前じゃのう。どこじゃったか。

「はい。わたしは情報屋なのですが、情報を売りに来たんです。」

・・・情報屋？・・・どれ、探りを入れてみるとするかの。

「和美ちゃん、すまんが学園長という仕事も暇では無いのじゃ。遊びは友達との」

「・・・惚け無いで頂けますか学園長。わたしが転移して来た事に気付いて無い訳無いでしょう。それにわたしのクラス。雪広財閥の令嬢がいるわ学園長のお孫さんがいるわ・・・普通のクラスじゃ無いでしょう。わたしの事も何か感付いていたんじゃないですか？」

思い出したワイ。木乃香のクラスメイトじゃ。・・・この子は確かに魔力が高いからあのクラスに入れただけじゃったが、深読みする性格なのかのう？それならそこにつけこめるが・・・。

「まあ、魔力の大きさだけで決めた可能性も十分ありますけどね」

・・・ダメのようじゃ。

「で、情報なのですが。いきなりこんな事言われても信用出来ないでしょうからとりあえずサンプルを持ってきました。どうぞ」

サンプル？・・・一体それは・・・なんじゃと!？

「学園長のメガ口と関西に対する本心、本国への情報隠蔽と虚偽報告、資金の不正使用の証拠（録音テープと写真付き）です」

「ど、どうやって・・・」

「情報屋ですから」

理由になつたらん……。

それにしてもこれはマズい。もしこんな情報が流れたらワシは破滅、
関西の命運も尽きることになる……。

「……何が目的じゃ」

「ですから情報屋としての売り込みです。安心して下さい、その情
報を広めるつもりはありませんから」

「何故ワシに売り込むんじゃ？こんな情報を掴めるぐらいなら金な
んぞいくらでも手に入るじゃろ」

「勘違いの無いように言っておきますが、わたしの目的はお金では
ありません。情報の対価としてお金を受け取ることはあっても、そ
れは情報屋としての正当な評価をしてもらうのが目的です。

それにそもそもわたしは「情報屋」であつて「タカリ屋」ではあり
ません。ですから情報の売り買い以外でお金を受け取るつもりはあ
りません。

で、学園長に売り込む理由ですが、まずお得意様兼後見人が欲しい
ということ。客が居なければ仕事になりませんし、わたしはほぼ個
人で動いているので有事にバックアップしてくれる組織が欲しいの
です。

つぎに、その上で学園長を選んだ理由ですが、わたしは基本的に日
本、特に麻帆良で活動するつもりですので、麻帆良を掌握し、関西
とも強い繋がりがある学園長は都合が良いこと等が理由です。

また、メガロが嫌いだというのも理由の1つです」

「なるほどのう」

・・・これが全て事実ならかなりありがたい。この資料だけでもこの娘の優秀さが伺えるしの。じゃが、どこまで信用して良いものか・・・。

いや、寧ろ信用出来ない相手であればあるほどここで断る訳にはいかんの。それだけの物を握られてしまつておる・・・。

「よかるう。おぬしの・・・あゝ、顧客兼後見人になろう。・・・後見人とは何をすれば良いんじゃ？」

「先程言った通り有事の際に少し協力してもらう程度です。匿ってもらつたり。戦力が必要になる要求はしませんし、無理な要求をする時は十分な対価をお支払いします。」

「うむ、それぐらいなら大丈夫じゃ」

「では交渉成功の記念にいくつか提案を」

「・・・なんじゃね」

いきなり何を言い出すつもりじゃこの娘

「明石裕名と近衛木乃香に魔法を教えるべきです。木乃香さんには陰陽術ですが」

「むりじゃ。明石教授の教育方針に口は出せんし、木乃香に教えられないのには理由がある」

「両方知っています。ですが、このままでは2人共知らずに巻き込

まれてひどい目に遭いますよ？まあ、木乃香さんはわざと関わらせ
るつもりの方ですか」

「木乃香はともかく明石教授の娘が関わるといのは……」

「関わります。まあ、こっちははっきりした証拠を用意できている
訳ではありませんけど」

「……まあ、伝えはするが決めるのは明石教授じゃぞ」

「今はそれで構いません。で、木乃香さんの方ですが、学園長の言
う「問題」をかなり解決出来る情報……要ります？」

「……いくらじゃ」

「そうですね……初回サービスということで世界樹の枝直径3セ
ンチ×長さ30センチ1本と新鮮な葉っぱ100枚、それに現金が
8000万円で手を打ちましょう」

「い、いくらなんでも高すぎるぞい！？それに世界樹の枝や葉っぱ
なんぞ勝手に採る訳には……」

「情報の価値を考えたら安過ぎるぐらいですよ。それともその世界
樹の枝と葉の横流しの回数言っただけですか？」

「……分かった、支払おう」

「では……まず、元老院の旧世界担当者 ロックワルド議員、
ミルズ議員、シャーウッド議員 の汚職と不祥事の資料です」

「・・・広辞苑が3つ並んでいるようじゃの」

「正直不祥事を探すより整理する方が数倍時間がかかりました」

・・・さすがMM元老院議員は格が違うの。

「まあ、確かにこれがあれば本国の圧力をかなり減らせるのう」

「暗殺されないように気を付けて下さい」

「・・・気を付けよう。で、「まずは」と言うことはまだあるんじゃない？そもそもこれでは解決せんぞ？」

「もちろん。・・・どうぞ、関西の反乱分子の一覧と、その有力者の不祥事 禁呪の研究や命令違反等 です」

「ほう・・・なるほど。確かに助かるが・・・正直に言って婿どのがこれを政治に有効活用出来るかと言うと・・・」

「無理でしょうね」

「ではどうしろと言うんじゃ。木乃香の事を何とか出来るのではなかったのかの？」

「もちろん。詠春さんには赤き翼時代にやっていた事をやって貰います」

「なんじゃ？」

「一言で言ってしまうえば「悪・即・斬」です。証拠を公開してとっ

とと肅正です。これぐらいなら詠春さんでもできますし、誰をどのタイミングでというのは学園長が指示を出せるでしょう」

「……………問題がありすぎると思うのじゃが」

「どうせ恨まれてるんですから気にしちゃいけません。そうすれば反乱分子の足並みも乱れますし、見せしめにもなりますから殺されるのを恐れて動きが鈍るでしょう」

「ふうむ、じゃがもし木乃香に陰陽術を教えるとして、教師はどうするんじゃ？」

「ですから惚け無いで下さい。あの新しい養護教諭、陰陽師でしょう？木乃香さんの護衛、そしてこう言う時の教師として連れてきた」

「……………本当に何でも知っておるのう。」

「分かった。婿どのとも相談せねばならぬから暫くしたらまた連絡しよう」

「分かりました……………これ、マホネットのメアドです。」

「うむ、出来るだけ早く連絡しよう」

「はい……………では」

「ああ、ちょっと待ちなさい。」

「なんですか？」

「おぬしは結局何者なんじゃ？人間にしか見えんが、年齢を考えると有り得ん」

「……その情報、お買いになりますか？」

「……いや、よい」

あまりに高くつきそうな気がするの……。

side 朝倉和美

「ふう、うまくいった」

「何が「うまくいった」だ。あんな弱み握られて逆らえるわけねえだろうが」

「でも攻撃されたり人呼ばれたらやばかったよ？わたし弱いし」

「普通千の雷を個人で使える魔法使いは弱いつて言わねえよ。それに何のためにワタシがいると思ってるんだ」

「ん、癒し？」

「ちげえ！護衛だよ！アンタとワタシがいりゃあそうそう負けねえよ」

「まあ、今はまだタカミチがそれほどでもないからね」

「アイツホントにそんな強くなんのか？」

「なるよ。・・・その代わり老けるけど」

「・・・ヤッパあの指輪はズルだよな」

「はは、全くだね」

「で、これからはどうすんだ？」

「ん？取り合えずは報告待ち。その後は・・・木乃香とオトモダチになるのかな」

「・・・可愛いそうに（ボソッ）」

「なんか言った？」

「何も言っただねえよ」

「そう（笑）」

さて、下ごしらえは終わり。これからは楽しむぞぞ！

第5話：味方作り（後書き）

ついに和美が動き出しました。

ですが、本文中にある通り和美は基本的に「情報屋」から外れるつもりはないので、「オレ強え」な展開には（あまり）ならない予定です。

なお、養護教諭はオリキャラ、刹那の前任の木乃香の護衛です。

まだ1週間も経たないのに二万PV超えにお気に入り登録200人・
・正直感激です。

どうかこれからもよろしくお願いします。

第6話：トモダチ作り

あれから2週間ほど経って学園長から木乃香に魔法の事を教える事にした、と連絡があった。その間に学園長が魔法世界に出張に行っていたり関西の過激派の有力者が3人ほど殺されているのを見るとこの2週間はお試し期間で、それで上手く行ったから受け入れる事にしたって所だろう。

ちなみにわたしはその間報酬として受け取った世界樹の枝と葉を使ってマジックアイテムを作っていた。・・・尚倉庫にも世界樹の枝と葉は一応あるのだが、質が違いすぎるのだ。倉庫にある素材は皆中の上程度なのに対し、麻帆良の世界樹は上の上の最高級品。さすがは世界有数の霊地の世界樹である。

で、そんな最高級品を使って何を作ったかと言うと・・・キセルとタバコである。

そこ、ガキがタバコ吸うなとか言わない。

世界樹の枝で作ったキセル本体は魔術で強化されているのでナギの杖並みに固く、しかも魔法の発動体としても超高性能。魔力の強化は指輪の方が高いが、消費魔力の効率化の効果が凄いな超名品だ。

ちなみに金属部分には軽くて魔力伝導性の高いミスリルを使用している。

更にタバコの方も世界樹の葉に様々な薬草や魔草、その他諸々をふんだんに使用して作った物で、1回吸えば空っぽの魔力が全快するというスーパード効果。欠点は1回分に世界樹の葉1枚丸ごと必要な事ぐらいだ・・・また学園長から巻き上げよう。

とにかくこの2週間はキセルとタバコの開発に費やしていたので無駄にはならなかった。丁度学園長からの連絡もあった事だし次に移るか……。

「で、ご主人ここだよ」

「前に話した吸血鬼の家だよ。」

「仲間にすんのか？」

「ん、いざというとき一緒に戦ってくれるって意味の「仲間」は難しいね。精々一緒にお茶して世間話する程度でしょ。今はそれで十分だしね」

……コンコン。

「……」

ガチャ

「誰だ？」

お、「目」では何度も見てたけどやっぱり生は違うな。学園長の時も生後頭部にはちょっと引いたし。

「はじめまして、わたしは「おお、これが噂のエターナルロリか」……」

いきなり何を言うんだ瑠璃。

「誰がエターナルロリだ！いきなり訪ねてきてふざけたことぬかすな！！」

「ロリはロリじゃねえか」

「き・さ・ま〜！殺してやる！おい小娘！その人形よこせ！」

それは困る。

「いやあ、この子わたしの護衛だしちょっと無理。それから瑠璃、暫く黙ってて」

「でもよお」

「黙ってて」

交渉以前の問題になるし。

「・・・わかったよ」

「よろしい。で、エヴァンジェリンさん、ちょっと用があるんだけど上がったていい？」

「・・・馴れ馴れしいやつだな。用とはなんだ？」

「まあ、色々。長くなるからな」

といつか立って話すのめんどいし

「・・・入れ。その代わりその人形後で貸せ。ぶん殴るから」

「まあ、そのぐらいなら」

自業自得だし。

「ちょ！？ご主人裏切ったな！？」

「あんたが悪いんでしょうが。・・・今のエヴァならたいして痛くないから大丈夫だよ」

騒がしい瑠璃を横目にエヴァの家に入る。やっぱり良い家だよな。老後を過ごすには最適って感じだ。

「で、何の用だ。それから自己紹介ぐらいしたらどうだ？」

「あ、忘れてた。わたしの名前は朝倉和美、職業は情報屋で麻帆良学園初等部1年。よろしく」

本気で忘れてた。というか瑠璃に邪魔されて言いそびれてた。そう言いつつ世界樹タバコに火を付ける。「いきなり馴れ馴れしくなっただな。というか小学生がタバコ吸うな」

「ん？これタバコじゃないよ？ほら・・・」

そう言ってエヴァに煙を吹き掛ける。

「ゴホツ・・・な、何をす・・・待て、これはなんだ！？」

驚いてる驚いてる。

「ん？薬草タバコ。色々薬草とか魔草とか使って作ったから寧ろ体には良いよ」

「どんな薬草を使った！？この効力は異常だぞ！？」

「色々だけど・・・メインはその世界樹の葉っぱ」

「世界樹、しかも蟠桃の葉だ！？お前何を考えてるんだ！？そんな貴重な物無駄遣いするな！」

さすが魔法研究者でもあるだけのことはあるな。価値がよく分かっている。

「さすがに普段は使わないよ。今日はエヴァに見せるために特別。キセルもタバコも自作だから」

「呼び捨てにするな。・・・というかまさかキセルも世界樹の枝か！？しかも自作って自作なのか！？」

「両方そうだよ」

「・・・何者だお前。少なくとも小学生では無いだろ」

「小学生だよ？ダイオラマ魔法球はかなり多用してるけど」

多分合計で5、6年分ぐらい。

「さて、魔法球は年をとるぞ？だがお前は外見は本当に小学生だろ
うが」

「魔法球の中での老化を抑えるマジックアイテムがあるから」

あれマジで便利。

「なんだそのふざけた道具は。使い放題じゃないか」

「まあ、わたしの魔法球の中でしか使えないし、その魔法球自体安
物だから時間は6倍程度で大きさもたいして広くないからね」

倉庫はチートだけど。

「それでもかなりの物だぞ。それで結局何者なんだお前は」

「さっき言った通り只の情報屋だよ？」

「小学生でしかもこんな物作れる時点で只の情報屋じゃないだろ！」

「はは、まあそれは秘密。・・・その情報買うなら話してもいいけ
ど」

「ちなみにいくらだ？」

「ん〜、エヴァが今後わたしに常に協力してくれること、かな？」

話す気無いしね。

「ふざけるな！」

「じゃあ交渉決裂だね」

「チツ……それで結局何の用だったんだ？」

「友達になりに来た」

「……ふざけてるのか？」

おお、凄い殺気。さすがは闇の福音、封印されているのにかなりの物だ。

「本気だよ。お互いにメリットも多いしね」

「お前も魔法関係者なら私の事や二つ名ぐらい知ってるだろう」

「エターナルロリータキティちゃん……あ」

……口が滑った。

「………殺す」

うわ、むっちゃ怒ってる。

「ごめんつい口が滑った」

「こんな口の滑り方があるか！」

「いや、何時もの癖で」

「何時もそんな呼び方してるのか！？と言つかさっきの人形の言いぐさはお前が原因か！！」

多分そうだな。

「ごめんごめん。で、えつと闇の福音とか不死の魔法使いとか中二病な二つ名が沢山だったけ？」

「・・・お前私と友達になる気無いだろ。まあとにかく、私はそんな二つ名が付くような悪い魔法使いなんだぞ？そんな私と友達になりたいなんぞ正気とは思えんぞ？」

「大丈夫。わたしも悪い情報屋だから。相性良いと思うよ」

「そういう問題ではない！大体お前は私が怖くないのか！？」

「全く。実際今の状態なら私と瑠璃の二人がかりなら絶対負けないし」

糸も合気柔術もかなりの腕だけど無詠唱魔術ぶちこみまくればすぐに終わる。今の状態なら不死でも何でもないし。

「くそ、呪いさえ無ければまとめて氷付けにしてやるものを・・・」

「でも友達になってくれたらメリットも大きいよ？呪いを解いたりとか」

「出来るのか！？」

「無理」

「おちよくつとんのか貴様!？」

正直おちよくつてる。

「はは、でも心当たりならあるよ?」

「本当にか?」

「ほんとほんと。まあ、短くても5、6年はかかる心当たりだけど木乃香ならそれだけあればこの呪いの解呪が出来るぐらいには成長するだろうし。」

「・・・多少成長方針に首を突っ込む前提で。それにそれが上手く行かなくてもわたしのマジックアイテムならなんとかなるだろうし、学園長なら今すぐにも解呪出来るだろう。」

「それでも何も無いよりは良い。なんだ」

「時期が来たら紹介するよ。友達になつてくれたらね」

「・・・そもそも何で私と友達になりたいんだ?お前のメリットは何だ?」

「いざという時相談ぐらいは出来る事、もしかしたら助けてくれるかもしれない事、情報屋の顧客になつてもらえる事、それから本当に友達になつてもらえたら嬉しい」

「前の3つはともかく最後のは何だ?」

「いや、わたし友達はそれなりにいるけど素で付き合える友達がいないのよ、精々瑠璃ぐらいしか。一般人は論外だし「正義の魔法使い」とは相性悪いし」

本当に腹を割って話せる友達がいないんだよね。

「なるほど」

「で、どう？」

「・・・分かった。友達はともかく協力関係は結ぼう」

「ん〜、一先ずはそれでいいよ」

まあ、上々な結果だ。

「よし。では早速だが情報屋、聞きたい事がある」

「・・・何？」

仕事なら真面目にやるよ。

「ナギの事だ」

「・・・わたしとしては一番してほしくない質問の1つだね」

「何故だ？」

「知ってるし話したいのにしがらみのせいで話せない内容だからね。情報屋としては不本意極まりない」

本当にプライドが傷付くんだよね、こっぴつこの。

「……そうか」

「……ただ1つだけ。生きてるのは間違いないよ。後この情報の報酬は要らない。不満な仕事だからね」

「な、本当に生きているのか!？」

「間違いなく」

「そうか……あいつが……」

なんかエヴァが回想モードに入ったっぽい。

「……じゃあ、今日はこれで失礼するよ」

「……あ、ああ。……ありがとう」

「どういたしまして。喜んでもらえて嬉しいよ」

情報を喜んでもらえるのは情報屋として一番嬉しい事だからね。

「じゃあ、また明日」

そう言って影のゲートで帰った。ちなみにまだ感動中だったらしく「また明日」にはシッコミ無しかった。

瑠璃は1時間ぐらいして自力で帰ってきた。二階でチャチャゼロと
意気投合していたらしい。

第6話：トモダチ作り（後書き）

感想お願いします。

私の元気と気力のもとです。

第7話：トモダチ作り 2

次の日、わたしは再びエヴァの家を訪ねた。

「・・・また明日と言っていたが本当に来るとはな

「わたしは本当の事を言わない事はあっても無駄な嘘は吐かないよ
」？」

これは本当。・・・完全に嘘を吐いちゃったら言い訳のしようが無いしね。

「・・・そうか。で、今日は何の用だ？」

「新しい友達を作りに行くんだけど一緒に来る？」

「・・・何故私を誘う」

「純粹な好意」

自分で言うっておいてあれだけど・・・胡散臭いな。

「信用しにくいセリフだが・・・だれに会いに行くつもりだ？」

「アルビレオ・イマ」

「な！？あいつ生きていたのか！？どこにいる！？」

「」

「は？」

「だからここ。麻帆良」

「はあ〜！？あいつ麻帆良にいるのか！？いつから！」

「2年ぐらい前からだね」

ナギが死んだとされた時からだからね。

「な・・・あいつ〜！麻帆良にいるなら何故連絡しない！」

「で、どうする？付いてくる？」

「当たり前だ！ナギの事も含めて全部問い詰めてやる！」

あのアルビレオ・イマが素直に話すとは思えないけどね。多分からかわれてうやむやにされて終わりだろうな。

「おっけー、じゃあ行こうか」

「だがどうやって行くんだ？私がこの2年気付かなかったって事は普通の場所じゃないんだろ？」

「影の転位魔法で。図書館島の地下だけど、エヴァ1人ぐらいなら連れて行けるからね」

さすがに図書館島の地下まで歩くのはねえ。

「ほう、意外と魔法使いとしても優秀なのだな」

「ちょっと小器用なだけだよ。本職はあくまで情報屋だからね」

「・・・そういう事においてやろう・・・チャチャゼロと瑠璃とか言う人形はどうするんだ？」

「連れて行くつもりだけど・・・あれ、瑠璃どこだ？」

「さつき二階に上がってったぞ。多分またチャチャゼロの所だろう」

「・・・よっぽど気が合ったんだね」

「どこか似てるからな。そういえばあの人形とドール契約はしてないのか？」

「・・・忘れてた。」

「あゝ、忘れてたな。別に今のままで困った事も無いしね」

「まあ、ドール契約はチャチャゼロみたいなただの人形を動かす時は必須だが瑠璃のように最初から動ける人形相手には別に必要ではないからな」

「それにドール契約の効果って魔力供給と召喚と感覚共有でしょ？どれも必要になった事が無いんだよね」

戦闘したこと無いし何時も一緒にいるし（学校では影の中）「目」で代用出来るし。

「そうか。・・・だがドール契約は早めにしておいた方が良さぞ」
「いつ何があるか分からないから？」

「それもあるが・・・あまりドール契約を先伸ばしにするとああいう意思のある人形はすねる事がある」

「・・・本当に？」

「正確には必要とされて無いんじゃないかと不安になるらしい。私も人から聞いたただけだがな」

エヴァの人形は全部チャチャゼロと同じように元はただの人形だから、かな。

「・・・早めに契約するよ」

「そうしておけ。・・・そろそろ二人を呼んで行くぞ」

「はいはい。瑠璃ー！チャチャゼロ連れて下りてきてー！」

・・・と、いうわけで。瑠璃とチャチャゼロも来たので出発！

又ッ

・・・なんか嫌な擬音で転位魔法が発動した気がする。

「ここにアルがいるのか？」

「いんや、このさらに下だよ。なにしろ図書館島の結界は異様に頑丈な上に何重にもなってるからね、結界破りの装備使いまくってもここまでが限界」

「・・・その趣味の悪い大量の指輪とブレスレットとネックレスはその為の物か」

「そ〜ゆ〜こと」

一個一個はなかなかセンス良い筈なんだけどねえ。これだけごちゃごちゃしてるとどうにも・・・。

「で、ここから先はどう行くんだ？」

「ん〜とりあえず」

「とりあえず？」

「お〜いア〜ルビ〜レオ〜！！幼女が2人遊びに来たぞ〜！！」

とりあえず呼んでみる。

「ふざけてるのか！？そんなので来るわけ「おやいらっしやい。そちらのお嬢さんははじめまして、キティはお久しぶりですね」・・・」

・・・本当に来たよ。

「・・・あゝ、はじめましてアルビ。クウネル・サンダースと呼んで下さい」クウネルさん」

この時からすでにクウネル・サンダースなんだ・・・。

「おい、アル！貴様これまで何してた！聞けば2年も前からここにいたらしいじゃないか！！」

「クウネル・サンダースですよキティ」

「ふざけるな！それからキティと呼ぶな！」

「ははは、キティはキティでしょう」

「貴様〜〜！！」

「」

「！！」

・・・よく飽きないな。

「えっと、そろそろいいかな？」

「はあ、はあ、・・・くそっ。おいクウネル、この小娘がお前に用があるらしいぞ」

「おや、私に？何の用ですか？」

「友達になって下さい」

「……もちろん構いませんよ。あなたのような可愛らしいお嬢さんなら大歓迎です」

「……ニツコリ笑ってるけど目は笑って無いね。」

「でしたらわたしがここの結界通れるようにしてくれるかな。いちいちこんなフル装備してくるのも面倒だし」

「……それはちょっと問題があるのですが」

「ありませんよ。この下に何かあるかも2年前何があったかも知ってますから」

「……いいでしょう。ただし余計な事はしないように」

「もちろん」

知ってる「バラされる危険があるって事だからね。アルの立場ならわざわざ逆らったりはしない。……いざとなったらわたしを消すつもりだろうけど。」

「……おいちょっと待て。この下とか2年前とか何の事だ」

「エヴァは知らなくていいことだよ」

「キティは知らなくていいことです」

「ふざけてるのか貴様ら！？と言つかお前達今日会ったばかりだよな！？」

「当たり前じゃないかエヴァ」

「当たり前じゃないですかキティ」

「ホントに息ぴったりだなお前達！？」

「はっはっはっは」

「遊ぶな〜！！」

この後暫くエヴァで遊んでからまた影のゲートで帰った（結界の効果を受けなくなったのでかなり楽に帰れた）。

・・・当たり前だけど真面目な話もしたよ？情報屋としていつでも連絡してって伝えたし。・・・まあ、あのアルビレオ・イマがわたしを頼る事はまず無いと思うけど。わざわざわたしの不利益になる事をする人？じゃないから関係を持っておいて損は無いしね。

ちなみに終始空気だった人形×2は「お前の主人カワイイな」とか「オマエノシユジンセイカクワルイナ」とか話していた。

その夜

「瑠璃、ドール契約するよ」

「はー!?どうしたんだいきなり!?!」

「嫌?」

「べ、別に嫌じゃねえよ。もちろんやりたいわけでもねえけどご主人がどうしてもって言うんならやってやらねえわけでも……」
「ゴニョゴニョ」

……相変わらずツンデレなやつだった。

第7話：トモダチ作り 2（後書き）

遅くなってすみません。

ドール契約については完全に創作なので、変な点があったら教えて下さい。

あと、感想よろしくお願いします。

第8話：トモダチ作り 3

1996年4月 朝倉和美7才・小学2年生

1年ほど時間が飛んだがその間これと言って特別な事はしなかった。精々2週間に1度エヴァを連れてアルビ・・・いやクウネル・サンダースに会いに行っていたぐらいだ。

そのお陰で2人とはかなり仲良くなれたが・・・もっともエヴァとは普通に仲良くなれたが、クウネルからはいまだに含みを感じる。警戒は解かない方が良さだろう。

他にはアスナが転校してきたが、精々普通のクラスメイト程度の付き合いしかしていない。今から接触しても面倒事が増えるだけだからな・・・記憶を戻すなら話は別だがさすがにリスクが大きすぎる。

ちなみにアスナは原作通りいんちよと喧嘩するほど仲が良い、な関係になっている。木乃香も同じクラスだがまだ普通の友達ではない。多分あそこまで仲良くなったのは中学に上がって同じ部屋で暮らすようになってからなんだろう。

わたしはと言うと特別仲が良い親友も仲が悪いクラスメイトもない。ただ情報通キャラで通してきたからみんなの信頼は厚い。良いポジションだ。

さて、だからと言って原作開始までこのまま何もしない訳にもいかない。特にエヴァとの約束を果たすために・・・つまり呪いを解くために木乃香と接触しなくてはならない。ちなみにこれまで遅らせ

たのは木乃香が最低限の知識を得てからでないかと面倒だったからだ。

「とゆゝわけで木乃香、ちょっと話があるからこっち来てくれる？」

「ん？何が「とゆゝわけ」なんか知らへんけど別にかまわへんで？」

「あんがと。じゃ、こっちこっち」

ちなみに今は下校時間、木乃香を連れ込んだのは適当な路地裏だ。

わたしは普通に家に住んでるし、木乃香は学園長の家に住んでるのだが、通学路が途中まで被っているのだ。

なお、学園長の家で木乃香の世話をしているのは西出身の使用人達だ。「目」で見たところ木乃香はやたら丁寧に扱われるのが不満っぽい。

・・・まあ、わたしだって風呂から食事から常に世話されてたらうんざりするだろうな。正直言って学園長が過保護過ぎる。多分魔法を学ぶ事になって過保護が悪化したんだろう。

「で、話ってなんや？」

「うん、魔法の事」

「・・・何の事や？」

お、ちゃんと教育してるみたいだな。魔法の隠蔽についても政治について。・・・まあ、まだポーカーフェイスは未熟だけど。

ちなみにわたしは特典のお陰でポーカーフェイスは完璧に使える。

「ごまかさなくていいよ、わたしも魔法関係者だからね。学園長も知ってるよ？」

「……………それで何の用や？」

わざわざ学園長に念話で確認を取るとはね。

「ん〜いくつがあるけど、とりあえずは友達になりたいな。表でも裏でも」

「ずいぶんあっさりと怪しさ満載なこと言ってきたな。何が目的や？おじいちゃんとの繋がりが、関西との繋がりが。それともそれ以外なんか？」

「…木乃香が原作からは考えられないほど黒くなってる。そう言えば政治学や組織運営学や帝王学は学園長じきじきに教育してたな。…それか。」

「どれでもないよ。わざわざ木乃香を通さなくても自力でどうにでもなるからね。…実際今も学園長となかなか良い関係が築けている。信じられないならまた学園長に念話で確認取っていいよ。」

「気付いとったんか」

「今はまだわたしの方が魔法使いとしても優秀だからね」

いずれ確実に追い抜かれるだろうけど。

「……………そうみたいやね」

「ま、とりあえずこのままこんなところで話すのもあれだしわたしの家で話そ。ここからならすぐだし。学園長に許可取ってさ」

「このぐらいならまず拒否されないだけの貢献はしてるからね。」

「ちょいまち。……………分かった、ええよ。」

「よし、じゃ行こうか。」

「ただいま。お母さん友達連れてきたよ。」

「あらいらっしやい。そういえば和美が家に友達連れてきたの初めてね。えっと……………」

「近衛木乃香います。よろしゅう。」

「ふふ、こちらこそ。和美のことよろしくね。」

「……………分かりました。」

「はは。じゃ木乃香、わたしの部屋こっちだから来て。」

「うん。……………友達おらへんの?。」

「……………はっきりに言っな。」

「そりゃいるけど放課後は魔法関係で忙しいからね。木乃香もでし

「よっ。」

「週に3日は遊んどるよ」

さようですか。

「それに・・・お母さんに何かしとるん？なんかやな感じがしたで？」

「軽い認識阻害をね。うちの両親は一般人だから」

「・・・ふうん。なんで和美だけ関係者なんかは聞かん方がええみたいやね」

「情報料払ってくれるなら話してもいいよ？」

「・・・よしとくわ」

「そう」

ある程度腕が上がった時に両親に認識阻害かけて家の周りにも軽い結界を張ってある。

悪いとは思っけど正直今世の両親に特別な感情は持てないんだから仕方ない。

「・・・さて、適当に座って」

「その前に1つええ？」

「何？」

「そこに並んでる人形、全部ただの人形じゃないやろ。なんや？」

「ああ、戦闘用の自動人形だよ。わたしが家にいない間の防衛用にね」

特に魔力を隠してもいないからさすがに気付くか。

「……なるほど。で、結局何の用なんや？」

「とりあえずさっき言った通り友達になりたい」

「とりあえず素直に目的を言い。話はそれからや」

「普通に友達になりたいのは本気だし、それ以外は木乃香が日本を掌握した後いざという時の後ろ楯と平時の情報屋の顧客として今のうちに仲良くなっておきたい」

「随分気の長い話やね。それにうちが日本を掌握ってつまり西洋魔術師を追い出して陰陽師を完全にまとめた時の話やろ？そんな上手く行くか分からへんよ？」

「上手く行くよ」

「どないして？」

「わたしが全面的に協力してるんだ、失敗なんて有り得ない」

「……随分自信があるんやね」

さすがに疑ってるな。いや、自信が有りすぎるのを警戒してるのか。

ただの誇大妄想狂だったら仲間にしても害にしかならないからな。

「情報屋としてそれだけの能力はあるからね。自分の能力を客観的に見れる自信はあるし、その上で言ってるんだよ？」

「・・・それにわたしがただの自信過剰な馬鹿でも何も問題は無いよ？もしそうだったら手を切れれば良いんだから。まだまだ見極めるための時間はたっぷりあるしね」

「まあええやる。とりあえずおじいちゃんとも仲良いみたいやし友達になるのは構わへんよ。・・・で、他にもなんかあるんやる？」

「もちろん。・・・木乃香にはエヴァの呪いを解いてほしい」

「エヴァって・・・エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル？」

「そう。知ってるでしょ？」

「そら知つとるけどな、なんでそんな危険な事せなあかんの？それにそれ以前にサウザンドマスターの呪いなんて今のうちには解けへんよ？」

「まず前提として、エヴァは女子供は殺さないから危険はあまり無い。さらに、解くのは今すぐじゃなくて5、6年後。で、こんなことを頼む理由だけど、わたしと呪術協会の利益のため」

わたしの方は正確には借りを返すため、だけどね。

「どんな利益や？」

「わたしの方は呪いを解くって約束しちゃったからそれを守るため。」

関西は、呪いを解く時に強制証書あたりで西洋魔術師との戦いの時の協力を取り付ける。代わりに呪術協会がエヴァのその後の立場を保証する必要があるけど、それはむしろ利益になるね。エヴァが関西に留まる理由になるし」

「なるほど・・・じゃ、それをおじいちゃんやなくてうちに言う理由は？」

「学園長は確実に反対するから」

そこが問題なんだよね。

「・・・やったらうちも断った方がええんとちゃう？」

「ん〜、難しい話なんだけどね、今の学園長は過保護になりすぎてるんだよ。万が一木乃香が死んだら学園長の目論見は崩壊するから仕方ない事ではあるんだけど、はっきり言って慎重過ぎる。

それに、学園長はあの年だから気が長いんだよ。あのペースだと目的を果たすまでに四半世紀はかかる。それじゃ遅すぎるしわたしもエヴァも待つてられない」

「もう年やからむしろ焦るんちゃうの？」

「あのじいさんの事だからね、多分後50年は生きるつもりだと思っよ」

「・・・おじいちゃんなら有り得んとも言えへんな。」

あの妖怪じいじの事だから延命の魔術ぐらい使えるだろうしね。それこそ霊地の1つや2つ使い潰す勢いで。

「ほれと、もしうちが断つたら闇の福音との約束はどないするの？」

「自分で何とかする」

「できるん？」

「出来る。でも、そうすると関西がエヴァを引き込むのは不可能になる」

「……どないして？確かに恩は売れへんけど、さっき言っとった関西での身元保証と引き換えに味方にはできるやる」

「無理だね。エヴァは良くも悪くもプライドが高い。「借りを返すために仕方なく」受けることはあっても「守ってもらったために」関西と協力することは有り得ない」

理屈では木乃香の言う事も正しいんだけどねえ。

「なるほどなあ」

「それに今は大チャンスなんだよ。ただわたしが呪いを解いたらそれで貸し借りが終わりだけど、そこに木乃香が入ったらエヴァは木乃香に借りができる。状況も結果も同じなのにね。まあ、わたしも木乃香に借りができるけど」

その借りは全然問題にならない。その程度の借りを返せる情報なんざ腐るほど握っている。

「……分かった、ええよ。おじいちゃんはうちが説得する。」

それでうちは何したらええん？」

よっしゃ！木乃香釣れた！

「しばらくは……と言うか呪いを解けるようになるまでは修行だね。ただ、これからは治癒と呪詛払い……と言うか呪詛全般を中心に訓練して」

「わかったえ。……ほな、今日はこれで。おじいちゃんと話さなあかんから」

「うん。……これからよろしくね、木乃香」

「よろしゅうな、和美」

この後木乃香は母さんに挨拶して帰った。

学園長は過保護だが、理屈が通じない程じゃない。特に利害には敏感だからこれで大丈夫だろう。

……ひとまず早めにやっておかないといけない事はこれで全部。後は時期を見つつ臨機応変に、だな。

第8話：トモダチ作り 3（後書き）

・・・あれ？どうしてこうなった？

木乃香がここまで黒くなるのは正直予想外でした。・・・まあいっか。

更新は今後2、3日に1度のペースが続くかと。調子が良ければできれば毎日投稿したいなあ。

後、感想お待ちしています。

・感想がないと興味を持って下さってる方が少ないのではと不安で・・・

第9話：あの冬の日（前書き）

前話の木乃香が年齢考えたらあり得ない、とのご指摘を頂いたので
とりあえず説明をつけてみました。

・・・でもネギだって原作開始時点では9才なんですよね。

第9話…あの冬の日

「何の用ですか学園長」

「つい先ほど学園長に緊急の要件だと呼び出された。緊急の要件……まず間違いなくあれだな。」

「3日前、ウエールズにあるとある村が悪魔に襲撃されたのじゃ。知つとるかの？」

「事件の存在自体はリアルタイムで知ってた。他に知っている事は実行犯のプロファイルと召喚された悪魔の数と種類、被害者の数と名前、黒幕の名前と動機ぐらいだね」

「……つまりほぼ全部知つとるわけじゃな？」

「ま、わたしより詳しい人はいないと思うよ。黒幕も実行犯や被害者の事はあまり知らないだろうしね」

悪魔召喚をさせるのによく知ってる信頼できる部下や仲の悪い部下を使うはずがないからね。そもそも元老院がこんな襲撃に自分達につながる可能性のある人間を使うはずがない。

「とりあえず犯人と黒幕の情報と証拠は後で買わしてもらおう。じゃがその前に1ついいかの？」

「何？」

「……今回の襲撃、いつから知っておった？」

「襲撃が起きたのを知ったのは3日前」

襲撃が起きた時だからね。

「……情報が早すぎる気がするが、まあよいじゃろ。では……襲撃が起きる事を知ったのはいつかの？」

「計画が始まったのが一年半前、この段階では一部の反災厄の女王派議員の愚痴レベル。1年と2ヶ月前に本気で襲撃を計画し始めて、1年前に計画が決定、1年かけて人材揃えて悪魔召喚の儀式の準備をして、3日前に実行」

「……そんな前から知っておったのか。なぜ言わなかった？」

「聞かれなかったからね」

「味方だと思つとつたんじゃがな」

「味方だよ、呪術協会のね。でもわたしは呪術協会の利益になるならともかく害になる情報を自分から売り込んだりはしないよ」

「……どうして害になるのかの？」

「逆にもし知つたらどうしたのさ」

「本国にその情報で圧力をかけるなりメルディアナに教えて恩を売るなり使い方はいくらでもあるわい」

「まず本国の方だけど、さすがの学園長も元老院議員を10人以上

も敵にまわして完璧に対応するなんて無理でしょ？今は3人だから平気みただけど」

「・・・10人以上おるのか。確かに厳しいかもしれんのか」

「次にメルディアナだけど、もし教えても自力ではどうにも出来ない。こつちに協力を要請してきたらさつきと同じだし、自力ではやろうとして失敗したら情報源がバレる事になる」

正直メルディアナとあの村の規模で本国とまともに戦うなんて無理でしょ。政治力皆無だし戦力もたいしたことないし。・・・まあ、校長は結構な実力者らしいしスタン辺りもそれなりではあるけど。

「結局ワシが睨まれる事になる、というわけか」

「そうということ」

「じゃが教えといてくれてもよかつたんじゃないかろう？余計な事をしなればいだけじゃろ」

「万が一「知つてて放置した」なんて事がバレたら終わりだよ学園長。まあ、そんなへましないとは思っけど念のためにね」

「・・・そうか。じゃがこれからはそういう大きな動きは教えとくれ」

「毎月2500万」

「ひよ！？今でさえすでにメガ口の旧世界担当者と関西の過激派の情報に毎月2000万に世界樹の葉を10枚も払つとるんじゃぞ！

「？」

「嫌なら構わないよ」

「・・・分かったワイ。そのかわりしつかり頼むぞい」

「ちゃんと報酬貰えるならしつかりやるよ」

「うむ。最後に1ついいかの？」

「何？」

「ネギ・スプリングフィールドの事じゃ。お主だったらどうする？」

「情報じゃなくて意見？」

「そうじゃ」

「・・・わたしだったら早めにメルディアナを卒業させて修行でメガ口の手が届きにくい所にする。ゲートが無くてある程度政治力のある魔法使いの組織にね。・・・麻帆良は最適だね」

「・・・ふむ、参考にさせてもらおう」

多分学園長も同じ事考えてるんだろう。原作を考えれば間違いない。

「こつちも最後に1ついいかな？」

「何じゃ？」

「木乃香の事」

「うむ、近衛の血を引いているだけあってかなりの物じゃぞ。特に治癒術の才能はとんでもないレベルじゃ」

「それぐらいは知ってる。聞きたいのは政治力・・・というか交渉力の事」

「それもかなりの物じゃ。木乃葉も天才じゃったが木乃香はそれ以上じゃ。今から将来が楽しみじゃ」

「才能だけじゃ無いでしょ。あの異様な家庭環境 わざと色々な派閥の息のかかった人間をまとめたドロドロの中で育ったのも大きいだろうけどそれだけでも無い・・・何をしたの？」

「ちょっとばかり物覚えが良くなる魔法と人の心に敏感になる魔法を使っただけじゃよ・・・しかしなんで今さら聞いてくるんじゃ？まさか・・・気付いとらんかったんか？」

「・・・・・・・・」

「いやはや、お主にも分からん事があるとはのう。驚いたワイ」

むっっちゃ楽しそうに笑ってやがる。

「わたしは魔法はあまり詳しくはないからね。素人が難しい数式を見て何やってるのか分からないのと同じで何か魔法を使ってるのは分かってても具体的な事は分からないよ」

「なるほどのう」

まあ術式を見れば調べる事も出来るんだけど、このじじいなんの触媒も動作も呪文も使わずにやったから全然気付かなかった。

「というか人の心に敏感になる魔法なんてあんな蛇の巣に住んでる子供に使うて大丈夫なの？発狂しかねないと思うんだけど」

「今度は大丈夫じゃよ」

「……………」

なんだ「今度は」って。

「それに発狂せずに済んでもかなり性格が歪むと思うんだけど」

「木乃香は近衛を継ぐ事になるのじゃ。むしろ多少歪んどった方がいいワイ」

「……………そう」

その歪んだ成れの果てが今のあんだだよ、ぬらりひょん。

「話はそれだけかの？」

「これだけだよ。……じゃあこれで」

「ではの」

それにしても学園長、木乃香に何かしたとは思ってたが・・・「今度」の「前」は一体何だ？木乃葉では無いだろうし・・・。
わたしの「目」は「今」の事しか見れないからな、「過去」や「未来」を見れる手段も考えた方がいいか？
それに目に見えない魔法に気付けないのも危険だな。何か対策を考えよう。

第9話・あの冬の日（後書き）

木乃香の理由付けはとりあえずこうしてみました。

学園長についての話は今外伝を少しずつ書いています。投稿するのは原作開始以降になると思いますが。

外伝：近衛木乃香（前書き）

木乃香視点の外伝です。黒木乃香炸裂注意。

前半微ダークです。

外伝：近衛木乃香

うちが魔法の事を知ったのは実家を離れておじいちゃんの所に来てしばらくたった時やった。

おじいちゃんに呼ばれて部屋に行ったら見たことも無いぐらい真面目な顔をしたおじいちゃんがおつて、大切な話があるから良く聞くように、と言うて魔法の事を話し始めたんや。

魔法の存在、実家の事、呪術協会の事、西洋魔術師の事、そしてうちの現状とおじいちゃんの目的について。

正直に言うてあの時のうちはまだ全然分かつたらんかった。ただ、大変なんやなあと他人事のように思つとつた。

・・・とんでもない間違いやった。

話が終わった後、おじいちゃんはずちの先生やって5人の女の人を連れてきた。みんな優しそうで、実際優しかったんやけど、すぐに分かった。あれはずちのための優しさやない。ただうちに気に入られただけやつて。

気付いてすぐにおじいちゃんに先生を変えてほしいって言うたけど、それも修行の内や言うて認めてもらえんかった。

その先生やけど、

東条先生

近衛の四大分家の1つ東条家の人で治癒術と防御術、結界術の担当や。

東条先生は学校の保健室の先生もやつとるんやけど、先生の中では一番ましやつた。

なんでも東条家は昔から権力とか気にせんたちなんだそつや。・・・

やけどそれ故に代々の長に信頼されて、今四大分家で一番栄えとる
そうやから、どこまで本当かは分からへんけどな。

北条先生

北条家も四大分家の1つで研究者肌の人が多い家やから古い本とか
もすごい沢山持つとるし一番詳しいから選ばれたって凄いい嬉しそう
に話とった。

でもおじいちゃんが言うには学者肌で融通がきかんから逆に歴史を
ねじ曲げたり誤魔化したりせえへん思つて選んだんだそうや。

南条先生

召喚術の担当の先生や。

南条家も四大分家の1つで、召喚術に長けてるんだそうや。

佐伯先生

呪詛と呪詛返しや呪詛払いの担当の先生や。

佐伯家は呪術協会で近衛家の次に大きい家で、大昔は交互に長を決
めてたそうや。でも佐伯家の仕事は表沙汰にできへんような事が多
かったから、大分前に近衛家に長の座を完全に譲つて裏方に回つた
らしい。分家の先生達は警戒せえ言つとる。

赤羽先生

攻撃術と退魔術の先生や。

赤羽家は昔から戦闘が得意で、とうさまの青山家とも仲が良いんだ
そうや。

しかも、うちのおばあさまが　うちが生まれた時には亡くなつと
つたけど　赤羽家の出身やから近衛家ともかなり仲が良い言つと
つた。

そんな先生達を紹介されて次の日から修行が始まったんやけど・・・

はつきり言つて地獄やった。

普通の生活も大切にせえ言つて週に何日かは友達と遊べたけど、それ以外はずっと修行、ずっと勉強や。いや、それどころやない。寝とつても夢に出てくるし、学校に行つても陰陽術の方に頭が向く。国語の授業は複雑な古文書を思い出すし算数では魔術式を思い出す。学校で飼つとるウサギを見ても召喚術の事を思い出すだけ。

修行中もとても覚えられんような量の内容を思ったより簡単に覚えられたりもしたんやけどまた量が増えただけやった。

しかも陰陽術を習い始めてから人の気持ちに敏感になつたんか、先生達の嫌な感情をすごく感じるんや。

和美がうちに話しかけてきたんはそんな生活に疲れきつとつた時やった。

・・・別に物語みたいに助けしてくれる、とかやない。むしろ分かりやすすぎるぐらい利益の為やった。

やけど、先生達と違つてうちを騙そうとはせえへんし、それに利益の為でも「友達になろう」言うてくれたのは嬉しかった。全部分かつてくれる、魔法の事を話しても大丈夫な気を許せる「友達」はおらへんかつたから。・・・まあ和美は全部分かつてくれすぎるんやけど。「昨日　を習つたけど大変やつた」言うたら「あゝだったね」みたいに全部見てたみたいに返してきよるし。

とにかく、和美と友達になつた後は大分楽になつた。別に生活のサイクルが変わるわけや無いけど、学校で昨日は何を習つたとか話すだけで大分気持ち楽になつたんや。

やけど、そうやって話せば話すほど和美の異常性が目についた。和美はうちと違って一般人の出身や、何も特別な環境はあらへん。やのに和美はうちより遥かに裏の世界に精通しとった。いや、それどころやのうて情報屋としておじいちゃんが一目おく程の能力を持つとった。

1年、2年と経つにつれてうちは恐ろしうなってきた。

和美は友達やと思つとるし、信頼はせえへんけど信用はしとる。

やけどもし和美がうちに敵対したら・・・うちは勝てるんか？正面から敵対して来よるんやつたらどうにでもなる。呪術協会の力を使えば表から追い払う事は簡単や。・・・もつとも殺すのは自信が持てへん。多分和美が本気で隠れたら誰も見つけられへん気がするからや。

ただそれよりも問題なんは和美が呪術協会を牛耳ろうとした時や。うちかて今後もしバレたら呪術協会の幹部の信任を失うような事は沢山するに決まっとる。

そして和美ならその証拠を握るのは簡単やろ。そうなたらうちは和美の傀儡になるしかあらへん。それだけは避けねばならん。

やけど、どないすればええんか・・・うちはこの事をずっと考えておじいちゃんから和美の能力について分かった事も聞いて（それ以降は和美対策の事は全部念話で話して）、策とも言えへんような策を1つ用意した。・・・策やなくて策の準備を出来るようにする為のものやけど。

何かって言うと完全なノーモーションで使える、魔力や気の流れも隠せてかけられた相手も気づけない読心術を開発したんや。まあ、開発言うてもよくある読心術にこれまたよくある隠蔽術を組み合わせただけやけど。

多分和美の事やからうちが何か新しい術を作つとる事は気付いとるやろうけど、陰陽師やない和美には何の術かは分からへんはずや。つまり和美の対策が思い付かへんなら和美自身に弱点を聞こう、言う事や。

やけど、これにも問題がある。和美は自分でもよく「魔法は苦手だ」とか「戦闘は専門外」とか言うてる。だからやろうけど、何時も強力なマジックアイテムをじゃらじゃら着けてる。

対魔障壁を張るネックレス、対物障壁を張るブレスレット、そして精神に作用する魔法を防ぐペンダント……。

そのせいで全然チャンスが無かつたんやけど、ついにチャンスが訪れた。それは……小学五年生の修学旅行（6月、三泊四日、行き先は日光。泊まりの修学旅行は始めて）やった。……和美、いくら温泉やからって防御用どころか魔法の発動体の指輪まで外すのは不用心すぎや……。

とにかく、このタイミングで和美の頭の中を覗く事に成功した。まあ、隠密性重視の術の上、和美の精神力もかなりの物やったから分かった事はあまり多くはない。やけど、かなり役に立つ情報が手に入った。

まず、和美の情報収集能力についてやけど、どうも強力な遠隔視覚・遠隔聴覚みたいや。これはかなり重要な情報や。なにしろ未来や過去は分からへんし、人の頭の中も読めへん言う事やからな。少なくとも和美対策を念話とノーモーションの術で、というのはあったやようや。

次に和美の魔力やけど……どこが「魔法は苦手」や。うちほどやないけど相当な物や。気を付けなあかな。

最後が和美の気や。これは逆に一般人程度しかあらへんかった。随分バランスが悪いけど正直これは相当有効な情報や。というのは、魔法と陰陽術の違いに理由がある。・・・もっと正確に言えば魔法と陰陽術の呪いの違いや。

基本的に西洋魔術での呪いは「外から」や。まあ、西洋魔術は「自然の魔力」を操る技である以上当たり前なんやけど、例えば「石化」の魔法も身体表面、端の方から石になっていく。とにかく、その「外から」の呪いを防ぐにはやっぱり魔力を使う事になるんや。

やけど陰陽術の呪詛はちゃう。陰陽術は発動するのにも基本的には気を使うんやけど、呪詛も「内から」なんや。

つまり、何らかの方法で相手の内側 肉体そのものや魂 に直接作用させるのが呪詛や。やからその抵抗には気を使う。魔力では防げないんや。

つまり・・・一般人並の気しか持たない和美には呪詛がめっぼう良く効くゆうことや。・・・しかも風呂場で和美の髪の毛を（他のクラスメイトのと一緒に）手に入れたからいざとなったらいつでも呪える。これでもし和美と敵対しても大丈夫やろ。

でもな和美、うちは和美の事友達やと思うとる。やから・・・ずっと仲良くしような、お互いのために。

オマケ

「なあ和美、なんでお風呂でマジックアイテム全部外すん？別に錆たりせえへんやろ？」

「いや、なんか気分的に錆そうじゃん。なんとなくやな感じな訳よ」

「・・・まさか家でもお風呂では外しとるん？」

「ん？そつだよ？」

「・・・・・・・・（本気で不用心すぎやろ）」

外伝：近衛木乃香（後書き）

木乃香は和美の親友兼ライバルのポジションです。

今回の話の内容は和美は気付いていません。初めて情報戦で負けたって事になるのかな？魔法戦の要素もあるかも。

それにしても最終話が和美が木乃香に呪殺される未来しか見えない・・・。

第10話：鍛練と練習試合（前書き）

和美フルボッコタイム。

後武術についてかなりリアリティーの無い事言っているので注意。

第10話：鍛練と練習試合

1999年10月 朝倉和美10才

「はっはっは！さあ全力でかかってこい朝倉和美！手を抜いたりしたら死んでも知らんぞ！」

・・・どうしてこうなった？

わたしが小学5年生になった時、さすがにそろそろ体術も鍛えた方が良い、と思い至った。

当たり前の話だがわたしは完全な「魔法使い型」だ。前衛は瑠璃や他の人形に任せて魔法をぶっぱなすのが仕事だ。

しかし、わたしが魔法使いとして、つまり戦闘員として働くならそれで何も問題は無いのだがわたしの仕事は情報屋、いつも万全な陣形で戦えるとは思えない。

むしろ奇襲から突発的な戦闘に入る事の方が圧倒的に多いだろう。

で、ある以上わたしが全く接近戦が出来ないのはマズイ。接近戦の技術は奇襲に対する反応速度にも関わるから、今の状態だと奇襲で即死しかねない。

というわけで何か武術を学ぶことにしたのだが・・・何をやるかはかなり悩んだ。

まず「奇襲に対処する」という目的上武器を使う剣道やフェンシングは相応しくない。同じ理由で飛び道具は論外・・・まあ、ガン・カタという手はあるがさすがにそれは習得に無理があるし、そもそもこれも武器が前提だ。

そういうわけで素手で戦える武術になるのだが、選択肢の数がすごい。

というわけで検証してみたのだが。

1：空手

わたしの戦い方的に考えて力押しより「力がなくても戦える」武術の方が良いので却下。

2：柔道

さすがに打撃技が少なすぎて実戦にむかないので却下。

3：合気道

原作で優遇されてる武術その1。

確かに打撃と柔術がバランス良く含まれていてなかなか良いのだが・

・・・エヴァが極めているのが問題だ。

どういう事かと言うと、もしエヴァがわたしが合気道を学んでいる事を知ったらどうなるか、ということだ。

・・・まず間違い無く「鍛えてやる」とか言ってくる。とりあえず

合気道は最後の手段にしよう。

4：中国拳法

原作で優遇されてる武術その2。

ただこれは無理だ。他の日本にもある武術はどこかの道場を「目」で覗いて教本を読めばあとはゴーレム相手の組み手で実用的に調整

すれば実戦にも使える。

だがこれはそういつた武術が（残念ながら）戦う手段では無くなつて来ているからこそ自分で調整しても問題無いのであって、中国拳法はそうはいかない。

一言で言えば師匠も無しに中国拳法を学ぶのは無理だということだ。

こうして色々悩んで結果的にわたしが選んだのは少林寺拳法だ。

少林寺拳法

中国の河南省少林寺で行われている少林拳を元に日本人の開祖が戦後間もなく開いた武術。

打撃技と間接技を中心にした武術で、急所を狙ったり相手の力を利用したりして「自分よりも筋力のある相手とも戦える」ように作られている。

ちなみに始まった時はGHQによって武術を教える事が禁止されていたので「踊る宗教」として始められた。そのため現在も宗教学人でもある。

ぶっちゃけ少林寺拳法は「戦い」より「精神修養」を重視しており、大会でも乱取りは一切なく全て演武なのだが、むしろ実戦用にいじるのならそれぐらいの方がやりやすい。

それに道場もそれなりに多いし「演武中心」ということは直接の指導を受けられないデメリットも小さい。

そんなわけで少林寺拳法の訓練を始め、魔法球も使っているのですね。腕にはなつたのだが・・・今日の朝の事だ。

今日は休日だったのでクウネルの家でエヴァも含めて3人でお茶会をしていたのだが……。

「そういえば和美、最近何か武術でも始めたのか？」

「ん？ああ、少林寺拳法を少しね。やっぱり分かる物なの？」

「数ヶ月前から姿勢や動きが全然違うからな。しかし少林寺拳法が……使い物になるようになったか？」

「それなりには。才能はからつきしだけど時間だけはかけてるからね。」

半年間1日12時間やれば嫌でも上達する。

……で、ここまでは何も問題は無かったのだが……クウネルが余計な事を言いやがった。

「確かに才能があるようには見えませんね。でもどうせならキティに合気道でも習えば良かったでしょう。師がいるのといないのでは大分違いますよ？」

「（余計な事を）いや、あんまりエヴァに迷惑かけられないし、言った通り才能皆無だから自分のペースでやった方が良いんだよ」

「なるほど。ですがそろそろそれなりの腕にはなつたみたいですし、魔法戦の訓練もしているようですから実戦訓練をつけてもらうのも良いのでは？」

クウネル貴様絶対確信犯だろ！？

「なるほど、それはお前にしては名案だな。よし！決めたぞ朝倉和美！これからは私がわたしの別荘で1日1時間特訓してやるっ！」

「い、いや、いいよ。エヴァに迷惑かけたくないし（汗）」

「なあに、気にする事は無い。ここのところお前とアルにはからかわれてばかりだからな、その憂さ晴らし・・・いやお礼にミツチリ絞ってやる」

憂さ晴らしって言い切ったよね！？

「いやエヴァの魔法球じゃ年取っちゃうしわたしのは戦闘できるほど広く無いしだから別に無理して訓練しようなんて欠片も思わないわけでつまりなんと言っか・・・」

ヤバイ特典の交渉チートがなんか発動しない。

「なあに、とりあえず今日だけなら年齢とかも気にする必要もあるまい。さあそうと決まったら善は急げだ、行くぞ！」

「うわあ~~~~や~~~~め~~~~ろ~~~~・・・」

そんな感じで拉致られて今に至るわけだ・・・て！？

「それ、小手調べだ！【リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！！
氷の精霊101頭、集い来たりて敵を切り裂け！！魔法の射手・連弾・氷の101矢！！】」

「どこが小手調べだ!!!・・・くそっ!【フォーム・リフォーム・インフォーム!】風の精霊101人、集い来たりて敵を撃て!!魔法の射手・連弾・雷の101矢!!!」

よし!全部撃ち落と【氷爆!】どわ!?あ、危なかった・・・。

「はははは!!どうした朝倉和美?逃げてばかりじゃないか!」

「そつちがバカスカ撃ってくるから逃げる以外の事する暇が無いんだよ!」

一瞬でも止まったら死んでるわ!

「ほおう、ならばばらく攻撃はせんから好きに撃ってみる」

「・・・なら行かせてもらうよ。【フォーム・リフォーム・インフォーム!】契約に従い、我に従え高殿の王!!来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆!!百重千重と重なりて、走れよ稲妻!!」千の雷
!!!」

喰らえ!わたしの最大攻撃魔法を!!

「ふ・・・【氷楯】」

・・・は?それって初歩の防御魔法だよな。

「はは!そんな最下級魔法で上位古代語攻撃魔法を防げるわけ・・・な!?!」

む、無傷!?

「クツクツク。いくら上位古代語攻撃魔法と言っても基本がてんでなってる。だから密度がバラバラで弱いところは下級の防御魔法でも防げる程度だ。そして　ほらっ！！」

「ぐはっ！？」

な、殴られた！？いつの間に近づいた！？

「魔力の制御が出来てないから余分に魔力を消費し、身体強化をする程度の魔力も残っていない。しかも実戦経験が皆無だからこの程度の奇襲に全く反応できない。・・・自分の実力が理解出来たか小娘？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・慢心していた。独学で上級魔法を学んで、魔力制御はポロポロ・・・完全に原作のネギだな。いや、魔力や才能の差を考えるとただの下位互換か・・・」

「ククク、どうやら身にしみたようだ。それでどうする？頭を下げて頼むのなら鍛えてやらん事もないぞ？ん？どうする？」

「・・・考えるまでも無いな。さすがにこのままじゃ危険過ぎる。」

「分かった。頼む。・・・ただ出来れば年はとりたくないからわたしの魔法球がいいんだけど」

「良いだろう。魔法の座学と練習、体術の訓練はお前の魔法球で。実戦訓練は週に一度わたしの魔法球でだ。」

・・・では朝倉和美！これからは私の事をマスターと呼べ！1年でどこに出しても恥ずかしくない悪の裏ボスに調教してやる！ハッハッハッハッハ！！」

裏ボスって・・・確かにわたしはそんな感じだけど。

「修行は1日36時間！！心臓が止まる直前までしごいてやる。これまでの憂さ晴らしも含めてな」

「げ・・・いや、情報屋としての仕事もあるからそんな長時間は・・・」

動かしてる「目」が多いから確認と編集にすごい時間がかかるんだよ・・・。

「そつえば貴様やけに質の良いキセルを持っていたな」

「世界樹キセルの事？」

と言つか話聞けよ

「そつだ。よし決めたぞ、それも武器として使えるようにしよう。

私の鉄扇術を応用すれば大丈夫だろう。・・・良かったな朝倉和美、

メニューが増えたぞ？」

「・・・勘弁してください」

メニューが増えたよ、やったね和美ちゃん！

・・・やめてくれ。

こうしてわたしの生活にエヴァの訓練・・・いや拷問が加わった。
・ 確かに強くなれそうだから文句も言えない。

・・・誰か助けて。

第10話：鍛練と練習試合（後書き）

独学には限界がある、というお話。見本か実戦の機会があればまだ何とかなっても100%独学だところになります。

後少林寺拳法にしたのは作者がやって比較的書きやすいと思ったからだけで、深い意味はありません。

・・・ちなみに作者の母は少林寺拳法三段。恐い。

第11話：タイム・パラドックス（前書き）

独自設定・独自解釈が大量に含まれています。

第11話：タイム・パラドックス

2000年9月 朝倉和美11才

「・・・隠れてないで出てきたらどう？」

放課後、帰宅中にわたしをつけてきた奴がいる。・・・「目」で完全にお見通しなのにな。誰かと言つと・・・。

「・・・よく分かったネ。朝倉和美、ちよつと聞きたい事がアルヨ」

「何かな？ネギ・スプリングフィールドの子孫の未来人にして火星人、魔法世界の崩壊を防ぐためにタイムマシン・カシオペアを使ってやって来た超鈴音」

そう、このエセ中国人だ。この時代に来たのは半年ぐらい前だけ、下準備や自分の知識と現状のすり合わせに半年かけていた。・・・そしてわたしという最大のイレギュラーに気付いたわけだ。

「・・・ドウシテそこまで知ってイル？」

「情報屋だからね」

実際は転生者だからだけ。

「情報のソースを聞いているんだけどネ」

「さすがにそれは話せないよ。情報ソースは情報屋の命だからね。・・・こつちも1つ聞いて良いかな？」

「何カナ？」

「君がわたしに話しかけてきた理由は、『自分の知っている歴史の朝倉和美は一般人なのにこの朝倉和美は魔法にどっぷりつかっている』からかな？それとも『歴史を見るに朝倉和美は有能な情報屋だから味方に引き入れようと思った』から？」

「・・・前者ダヨ。ワタシの知る歴史では朝倉和美は情報収集には長けていたがあくまで一般人としてダタヨ。アナタみたいに裏の人間じゃナイ」

「・・・クツクツク・・・ハアーツハツハツハ！そうかそうか、『君の過去』ではわたしは一般人だったか！クククク面白いよ超鈴音！いや、ありがたい、と言った方が良いかな」

おかげでようやく「答え」が分かったよ！

「何が面白いのカナ？」

「クツクツク・・・なあ超鈴音、タイム・パラドックスって知ってるかい？」

タイム・パラドックス・・・つまり時間移動をしたことによる因果の矛盾だ。

例えばある男がタイムマシンで過去に行き、自分が生まれる前の父親を殺したらどうなるか。

父親が死ぬ 男が生まれなくなる 父親が殺されなくなる 男が生まれる・・・というように結局どうなるか分からなくなるのだ。

「・・・勿論知っているヨ、これでもタイムトラベラーであり科学者ダ」

「そうかい。でだ、タイム・パラドックスの解決にはいくつかの説がある。

1つ目は『映画バック・トゥ・ザ・フューチャー型』。過去に戻って未来を変えたらそれが正史になり、その結果トラベラーが消えても変化は残るといふ説。

2つ目は『映画タイムマシン型』。過去に戻っても未来は変えられない、事故で死んだ人間を助けても結局何らかの理由で死ぬといふ説。

3つ目は『パラレルワールド型』。誰かが歴史に介入するとその数だけ平行世界が生じ、互いに関わらずに存在し続けるという説。

・・・さて、では正しいのはどれでしょう？」

「・・・何が言いたいネ」

もう気付いてるくせに。

「つ・ま・り！『君の過去』と『今のこの世界』が矛盾している以上、全く違う2つの世界が同時に 正確には同時じゃないけど存在している以上、正しいのは『パラレルワールド型』だっていう証明になるわけだ！そして・・・ここが『朝倉和美が魔法に関わっていた世界』である以上君がここで何をしても『朝倉和美が魔法に関わっていない世界』の未来である君の世界は変わらない。そもそもここが『君の過去』だとしても新しいパラレルワールドができるだけで『君の世界』は何も変わらないってことだよ！」

「・・・ナ・・・そんな・・・コト、は・・・」

「いや、それにしてもカシオペアってのは凄いな！時間どころか世界まで移動しちゃうんだから。この分じゃ未来に戻っても元の世界に戻るかは分からないね！」

「……ふ……ふざけるな！！それじゃあナンダ！ワタシがやってきたコトは、やろうとしていたコトは全てムダだったと言っの力！！！」

つと、少し追い込みすぎたかな？……まあちょうど良いぐらいか。

「別に無駄じゃ無いよ」

「ドウシテそう言い切れる！」

「世界の『存在確率』」

「………ア」

気付いたか。

「いくらパラレルワールドと言っても無限の世界が同じように存在するわけじゃない。歴史はより『有り得る』歴史に近付こうとし、収束しようとする。その『有り得る』度合いが『存在確率』だ。だから……君だけが成し遂げても大して変わらないかもしれないけど、それでも君の計画が成功した未来の『存在確率』は上がる。そしてあらゆる世界の『君』が成功すれば……その『君の計画が成功した未来』が最も『有り得る』歴史になる」

「……成る程ネ、なら結局はやるコトは変わらナイカ。なら早速本題に入らせてもらおうヨ」

・・・立ち直りが早いな。

「アナタにはワタシの計画ニ協力して欲シイ。無論報酬八たっぷり出すヨ」

「いいよ、ただし条件がいくつかある」

「何カナ？」

「まず、情報屋としての仕事は完全に個別に扱ってもらおう。報酬はその都度交渉し、仲間だからといって値引きはしない」

これは情報屋として譲れない条件だ。

「・・・かまわないヨ。まず、という事はまだあるねカナ？」

「勿論。2つ目は『情報屋でないわたし』が協力する条件だ。わたしはこの計画について超に不利になる行動はしないし、文化祭期間には情報屋としても不利になる情報は売らない。また、わたしに多大な危険が無い限り協力する。その代わり超には強制証書で『計画が失敗した場合それ以降未来に帰ることなくわたしの部下になる』と契約してもらおう」

「ナ！？故郷に帰らず、この時代に骨を埋めると言うノカナ！？しかも部下について何をさせるつもりダ！？」

「あくまで失敗した場合だけだよ。成功したらただでわたしを味方に引き入れた事になる。そもそも成功したら残るつもりみただし、さっき言った通り元の世界に戻るかは分からないんだよ？あと、

仕事は情報屋としてだけだよ」

「む……分かったヨ、その条件をのむ。でも1つ聞いて良いカナ？」

……？何だ？

「かまわないよ。何？」

「そもそもワタシの計画には賛成なの力反対なの力教えて欲しいネ」

……そういえば言い忘れてたな。

「計画自体には賛成だよ。わたしからすれば魔法が広く知られるようになって魔法関係の情報屋としての仕事が増えるからね」

「そう力、ならかまわないヨ契約を結ボウ」

「オツケー。……じゃこれにサインして」

そう言つて影から強制証書を出す。中身は超がこの時代に来た時点で書いてあるから後は互いに署名するだけだ。

「……準備がいいネ。つと、結構細かく書いてあるネ……うん……うん、大丈夫だね。じゃあ……サインしたヨ」

「そんじゃわたしもサインするから貸して……よしできた。保管するのはわたしで良いかな？」

「かまわないヨ」

返事を聞いてすぐ影にしまった。強制証書つてのは下手に無理矢理廃棄すると呪いが発動してひどい目に遭うから管理に気を使っただよね。

「これでわたし達は晴れて仲間だ。これからよろしくね超」

「こちらこそヨロシク。未来のためにガンバロウ」

・・・未来のためね。ま、わたしの未来のためにも頑張るよ。

「だね。・・・これから超はどうするの？」

「あと半年準備を続けて4月に麻帆良に入学するヨ。同じクラスになれるといいネ」

「はは、多分大丈夫な気がするよ。・・・じゃあまた」

「うん、またネ」

そう言って超とは別れた。そして・・・。

「なるほどのう、そのような計画を立てている娘がおるのか。驚いたのう」

「でも学園長にはむしろ利益になるとおもっよっ」

「そうじゃの。婿どのにわが呪術協会が1000年以上に渡って日本を守ってきた証拠を集めさせよう」

「わたしも西洋魔術師の一般人向けのスキャンダルを集めとくよ」

「うむ、頼むぞい。じゃがワシはこの計画に直接は・・・」

「分かってるよ。その代わりもし失敗した時の隠蔽は任せるよ？」

「うむ、任されたぞ」

「じゃ、今日はこれで」

超、その強制証書でわたしが協力しなければならぬ「計画」は強制認識魔法まで、その後の「魔法世界の崩壊を地球と協力して防ぐ」のは契約外だ。・・・むしろわたしと学園長はその強制認識魔法をきっかけに地球と魔法世界を完全に分断しようとしている。

そしてそうであっても学園長が強制認識魔法に賛成である以上「計画に不利になる行動はとらない」という契約には抵触しないし、そもそも契約では「学園祭以外での情報屋としての活動」に制限はない。

契約内容をよくご確認下さい、ってね。

第11話：タイム・パラドックス（後書き）

念のために断っておきますが、朝倉と学園長は別に魔法世界の崩壊は望んでいません。むしろ崩壊されたら困ると思っています。ただ、魔法世界が地球に影響力を持つのを嫌っているのです。

朝倉は面白い世界の消滅を嫌がり、学園長は6700万人もの魔法使いの流入を嫌がっているからです。

第12話：解放と入学（前書き）

遅れてすみません！

第12話：解放と入学

2001年4月1日 朝倉和美12才

「じゃあいくえ〜」

「ああ、早くしろ」

エヴァの返事を受けて木乃香が呪文を唱える。・・・一応日本語の
はずだが何を言っているのかはよく分からない。とにかくこれでエ
ヴァの呪いは正常に戻る。

そう「正常に」だ。

4ヶ月前

「なあ和美、闇の福音の呪いの事なんやけど」

「ん？解けるようになったの？」

「実力的には大丈夫やと思うけど、見てみん事には何とも言えへん
からそろそろ紹介してくれへん？」

・・・そうか、確か木乃香は・・・。

「まだエヴァに会った事無いんだっけ」

「呪いの解除を条件にうちに協力してもらうんやから、あんまり
仲良くなると交渉がしにくいんよ。うちは割り切れるやろうけど闇

の福音はどうか分からへんから」

まあ、エヴァは仲良くなった相手が呪いを解けるって知ったら無理矢理にでも解除させようとするだろうな。

本気で拒否したら引き下がりはするだろうけどそうしたら関係改善は難しいし。

「分かった。・・・ただ、呪いの解除方法の事なんだけど」

「なんや？」

「解除じゃなくて正常に戻すって出来る？実行は4月以降で」

ちなみに「正常」というのは「ちゃんと学校に行って卒業したら解ける」状態の事だ。そもそもが登校拒否児童の為の呪いだしね。

「は？なんでまたそんな・・・ああ、なるほどな。数少ない友達とせめて中学校ぐらいは一緒に通いたいゆう事やな」

いや、一緒に通いたいっていうのは間違っではないけど。

「ま、まあ間違っではないけど。それにもうすぐビッグ・イベントがあるしね」

「ビッグ・イベント？・・・ああ、英雄の息子やな。確か来年度の最後の方から来る言うとったけど」

原作通りなら三学期の始めからだね。

「そ〜ゆ〜こと。どうせ木乃香達も何か企んでるんでしょ？だった

らお互いエヴァはいた方が都合が良いと思うよ?」

「・・・そやけど、もしバレたらかなりマズイヤる」

「それは大丈夫。エヴァは解けない物だと思ってるから多少無理があっても「あの馬鹿が無茶苦茶な呪いをかけたからな」ぐらいにしか思わないだろうし、陰陽術も詳しくないから。大体リスクとメリツトを考えなよ」

「・・・分かった。一応おじいちゃんに話してから決めるけど、それでええよ」

「おし!じゃあ明日の放課後紹介するね」

こうしてエヴァの呪いは半端に解かれる事になった。もっともすんなりいったわけではなく。

「なんで私が貴様らに従わねばならん!」

「そらうちらかて何の利益も無しには無理や」

とか

「大体私に呪術協会の後ろ楯なんぞいらん!」

「せやかて何の後ろ楯も無しにエヴァさんが解放されたら討伐隊が編成されてもおかしくないえ?」

「それを編成するのは貴様の祖父だろうが!」

とか

「そもそも解除の代価は『朝倉和美と友達になる』だろうか！」

「そうなん？」

「いや、それは解除の方法を紹介する代価。木乃香との交渉は別力ウント」

「騙したな貴様!？」

とか

「本当に解けそうだとは・・・しかしこれならじじいでも解けるんじゃないか？」

「「「「「「「「」」」」」」」」

「・・・力が戻ったら殺してやる」

とか

「じゃあこれから解くから強制証書を・・・」

「はい。内容も全部書いてあるから後は2人がサインするだけだよ」

「どれどれ・・・おい和美!!この『朝倉和美がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルに甚大な被害を与えた時を除きエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは朝倉和美に被害を与えてはならない』とかいう項目はなんだ!？」

「なんやて！？うちも聞いてへんよ！？」

「いや、念のためだよ。万が一に備えて。もしこれが受け入れられないなら全力で妨害するけど」

「………しゃあないな。和美の気持ちも分かるし、呪術協会がエヴァちゃんの後ろ楯である以上協会に対する攻撃も『エヴァちゃんに被害を与える行為』に入るやろうしな」

「……釈然とせんが木乃香が納得してるなら仕方ないな。それで良いから早く解いてくれ」

とか。

そして今ついに 呪いが、解かれる

パキィィ………ン

「フ……フッフッフ……ハッハッハッハッハ、アーツハッハッハッハッハ！！！！解けた！！ようやくこの忌々しい呪いが解けたぞ！！！！」

高笑いする金髪幼女……しっかりと記録しとこ。

「おめでとエヴァちゃん」

「おめでとつ。後たつた3年だよ」

「クツクツク、3年で確実に自由になれると分かっているんだ、そのぐらい耐えられるさ。何よりこれで学校から出れるようになったしな」

「ああ、呪いが無茶苦茶やったせいで何故か学校から一步も出られへんようになったからな」

「これで修学旅行に置いていかれて一人枕を濡らす事も無くなるね」
「クツクツク・・・朝倉和美、貴様さつきからケンカを売っているのか？」

「いやいや。・・・で、これからどうするの？」

「ああ、実は工学部棟に用があるんだ。新しい従者が出来たのでな、呪いが解けてから起動することにしていたんだ」

ああ、茶々丸の事な。・・・超のやつわたし通さないでエヴァと接触したんだよな。「借りを作りたくない」とか言って。

「そっか。じゃあまた今度ね」

「うちはまた新学期に、やね」

「ああ。ではな」

エヴァはそう言って歩き去って行った。・・・さて。

「木乃香はこれからどうする？」

「ん〜そやなあ、一緒に女子中等部の寮に行かへん？確か部屋割り今日発表やる」

そう言えばそうだったな。ちなみに荷物とかは部屋を知らなくても始業式までに送れば部屋に入れておいてもらえる。もっとも家具とかは備え付けなんだけど。

「学園長に聞いて無いの？」

「お楽しみに言つて教えてくれへんのや。和美は知つとるん？」

「わざわざ調べようとも思わなかったから知らないよ。そんじゃ行こつか」

原作通りなら木乃香は明日菜と、わたしは・・・分からないな。

そして

643号室：朝倉和美・神楽坂明日菜・近衛木乃香

・・・なんだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2086x/>

パパラッチ?いいえ、情報屋です

2011年10月25日02時06分発行